

もしも鈴木悟が少年だったら

パーピング

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

少年はどのように成長を遂げ

どのように生きていくのか、流れと自分の意志の間で揺れる少年の葛藤をお楽しみください

目次

第1話	1
世界征服？	17
白昼夢	38
新たなる世界	58
冒険のページ	82
補足	101
第7話	104

## 第1話

DMMO RPG あまた開発されたゲームの中でも燦然ときらめくタイトルの一つ「YGGDRASIL」

十二年前に発売されたそのタイトルは、キャラクター、アイテム、住居を思うがままにデザインできる圧倒的な自由度から爆発的な人気を博した

アインズ・ウール・ゴウン かつては「YGGDRASIL」内の数千を超えるギルドのうち、最高十大ギルドの一つとしてその名を馳せていた、

だが

かつては41人いたギルドメンバーもサービス終了間近の状況下でもたった一人だけになっていた。

00:00:01

中央に巨大な円卓が置かれ、その周りには41個の椅子が用意されていた。

だがその椅子に座るものは一人しか残されていなかった

大人数で使用されることを想定したその部屋には一人の少年がいるだけだった、

いつ来るともわからない、かつての仲間をその部屋で待っている

本名 鈴木悟 13歳 ゲーム内名 むささび

100レベルプレイヤーの竜人であり、魔力系マジックキャスター、透き通る銀髪におとなく少女のようにも見える非常に整った顔に、派手ではないが、よく見るとその作り込みが細部に施された灰色のローブを着ていた。

「みんな来てくれないのかな……」

少年の独り言が空しく大きい部屋に響く

視点に表示されている時間は23:45:39、サービス終了までもう15分

少年は近づいてくる終わりの時をただ待っていた

天井を見上げると、巨大なシャンデリアがつるされていた

「ナザリックも…なくなっちゃう……」

膝を抱え、目の周りが熱くなるのを感じる、だが何故か泣いてはいけない気がして、その涙をぐっと堪える、むささびはアインズ・ウール・ゴウンのギルドマスターなのだから、

そう思い、立ち上がる、そして椅子の背後にある黄金の杖を眺める、七匹の蛇が絡み合った姿をするその杖はギルドの象徴、ギルド武器、その名をスタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンという

圧倒的な力を持つその杖は破壊されればギルドが崩壊するという理由で一度も実戦で使われたことはなかった、本来ギルドメンバーの相談もなしに装備することなど許されない、そのギルドの象徴たる杖を手に取る

「みんな、怒りに来てもいいんだよ」

ポツリとつぶやくと部屋をでて、玉座の間へと歩き出す

玉座の間を目指して歩いていると人影を発見する

執事のセバスと戦闘メイド プレアデスだ

「だれもこなかったね…」

しゃべるはずのないNPCに独り言をいう

「NPCのみんなにも仕事してもらわないとね、『付き従え』」

コマンドを発動するとプレアデスたちは後ろを歩き、ついてくる

そうして歩いていけると目の前に巨大な扉が現れる

右側には女神が、左側には悪魔が異様な細かさで彫刻されている

小柄の少年が開けるには不可能と思われるその扉は、少年が近づくと自動で開くのだった

5メートルはあるその巨大な扉が開かれるとまさに豪華絢爛、で地下とは思えないほど広い空間が存在していた、天井からつるされたシャンデリアは七色の宝石で作られ出された幻想的な輝きを放ち、白を基調とした壁には各ギルドメンバーの大きな旗が41枚天井から床まで垂れさがっている

開く扉に誘導されるように中央からまっすぐひかれた真紅の絨毯を歩く、

階段前で立ち止まると後ろのプレアデスたちに命令を下す

「えつと……確か『待機』…だっけ」

階段の前でプレアデスたちを待たせると階段を上るとそこには美しい女性が立っていた

「アルベド…みんなには玉座の間を守ってもらってたけど、だれも…だれもこなかったね、ごめんね、働かせてあげられなくて」

NPCに言葉をかけるとそのまま少年には広い玉座に腰掛ける

「アルベドの設定はどんなだったかな、」

ふとそんなことを思い、コンソールからアルベドの設定を覗く

「うわっ、すっごく長い…」

そのまま読まずに下にスクロールする、すると

『ちなみにビッチである』

「タブラさんってこういう趣味だったんだ…」

しばらくぶりの友人の性癖に驚く、ちなみにビッチの意味はペロロンチーノから教えてもらった

「変えちゃえ」

そう思いスタツフをコンソールにかざす

するとキーボードが表示され、『ちなみにビッチである』を消す

「代わりになに入れよう…」

しばらく考えてキーボードをたたいて入力する

『ムササビを愛し、決して…』

「えへへ…」

コンソールを閉じて顔を上げる、そして壁にかかった41の旗を名を呼びながら数える

「たつちみーさん、死獣天朱雀さん、餡ころもっちもちさん、ヘロヘロさん、ペロロンチーノさん、ぶくぶく茶釜さん、タブラ・スマラグディナさん……楽しかった…たのしかったな……」

ぐすんと玉座の間に鼻をすする音が響く、必死にこらえても、どれだけ頑張っても、胸が締め付けられてほほを熱い涙が落ちる

「きえ…きえないで……おわらないで………」

23 : 59 : 30

「いや、だよ…みんな…す、すてないで…いかないで」

どれだけ拒否しても、どれだけ願っても、この時計は時を刻む

23:59:50

締め付けられる胸から必死に願いを叫ぶ

「みんな…もどつてきて…」

23:59:59

「……………」

00:00:01

玉座の間には少年のすすり泣く音だけが響いていた、

ほかに音を立てるものなどない、はずだった…

「むささび様？」

その声に勢いよく顔を上げる、

だれか来てくれたの？そう思いあたりを見渡すが誰もいない

「むささび様？」

声のする方に顔を向ける

「いかがないさましたか？おひとりで涙を流されて…」

美しい声が頭に響く

「なにかございましたら、このアルベドにお申し付けください！」

後ろではプレアデスたちがあわあわとしているが、むささびはそれに気づけない

「あつ…あるべどっ…」

アルベドが目の前まで近づいてくる

「はい！アルベドです！むささび様の！むささび様だけのアルベドです！」

なぜNPCが喋れるのかも、なぜこんなにアルな動きをするのかも、なぜこんなに胸が落ち着くのかもわからない、

「アルベド」

「はい！」

「アルベド！」

「はい！アルベドはここにいます！」

ただ今は何も考えられない、ただアルベドに抱き着いて、誰かがい

る、その喜びを、嬉しさを感じていたかった

アルベドは玉座の間で泣き疲れ眠ってしまった愛しい人を抱きかかえていた

顔を見ればその頬には涙の跡が見て取れた

なぜあんなにも苦しそうに泣いていたのかは、現在ナザリックに残されたものならば容易に想像ができることだった、アルベドは自分の中の黒い感情を押し殺す

「セバス」

「はっ」

愛しい主が起きないよう、小さ目ながらも威厳ある声で命令を下す「何かナザリックに異変が起きています、あなたはデミウルゴスを玉座の間に招いて防衛を任せなさい、その後、地表に上がり周囲一キロを調査、戦闘はできるだけ避け、意思疎通ができるものがいたなら話し合いで情報を引き出しなさい、時間はそう、40分といたところね、遅れたり、緊急事態の場合は必ず連絡しなさい」

「かしこまりました」

「プレアデスたちは各自、階層に赴き階層守護者たちに異常があつたと連絡を、ナザリックの警戒レベルを最大まで引き上げさせなさい」

ユリが頭を下げたそれにこたえる

「わかりました、そのように」

「私はむささび様をお部屋にお連れするわ、しばらく離れることはできないでしょう、その旨デミウルゴスにも伝えて頂戴」

言い終えると、愛しい人を抱え、歩き出した

部屋につくと明かりは付けず、そのまま主をベッドに寝かし、ベッド横の椅子に腰かける

愛しい人の寝顔を眺めることなど、乙女ならば胸躍ることなのだろうが、この状況では胸が裂けそうな思いだ、

ただただ愛おしい人の手を握る

「むささび様…」



寝苦しそうに、眉間にしわが寄っているがそれでもその美しい顔は崩れない

アルベドがそつと頭を撫でると入っていた力が徐々に抜ける  
胸に暗い感情が宿るのを感じるが、無視して今は愛しい人を見守る  
ことにする、、、

セバスは第七階層、赤熱神殿を歩いていた、

「やあ、セバス、来ると思っていたよ」

背後から声がかかる、

「デミウルゴス様、アルベド様から言伝を預かっております」

「玉座の間にて防衛を指揮する、といったところかな？」

「さそうでございます」

「セバス私に敬称は不要だよ、むささび様は？」

「むささび様は現在アルベドと共に寝室にてお休みになられております、アルベド様はしばらく動くことができないので貴方に任せるとおっしゃられておりました」

「ほう……」

デミウルゴスは興味深そうに、そして嬉しそうに声を上げる

「恐らく、貴方が望んでいるような状況ではないでしょう」

「さて、何のことかね」

悪魔が意地悪に笑う、言い返したくもなるが命令を最優先するべき  
だろう

「いえ、何でもありません、申し訳ございませんが、私は他にも地表に  
赴き調査せよとの命令を仰せつかっておりますので、これで失礼しま  
す」

「ああ、ありがとう、セバス、君はどれくらいで戻ってくるのかな？」

「40分ほどで切り上げろとのことですので」

「わかった、では待っているよ」

やはり、この悪魔は苦手だ、、、

そんなことを思いながら第七階層を後にする

セバスと別れてすぐ、デミウルゴスは焦っていた、防衛を任されるのは非常に光栄なことだ、だがそれ故に失敗は許されない

だがデミウルゴスはすでに失敗を犯していた

「なるほど、これが異常事態でしたか」

ナザリック内で犠牲者が出たしまったのだ

どうやらフレンドリーファイアが有効になっているようだ、それにより連絡に使った恐怖公の眷属が一匹、トラップに引っ掛かり命を落としてしまった

本来恐怖公の眷属は無限に召喚でき、一匹が死んだところで損失はほぼ無に等しかったが

至高の恩方々に使える者たちが、ナザリック内で事故により命を落とすなど、絶対にあつてはならない

フレンドリーファイアが有効になったということはナザリックの防衛を考え直し、連絡方法も確立しなければならない、もはやデミウルゴス一人では手に負えなかった、自分と同格の知能を持つものももう一人必要だ、デミウルゴスは決心してアルベドにメッセージを入れる

「アルベド、緊急事態です」

少し遅れてメッセージが返ってくる

「デミウルゴス、セバスには伝えたはずだけど？」

「申し訳ございません、ナザリック内で恐怖公の眷属がトラップにより命を落としました、どうやら法則が変わっているようです、私一人では手が回りません、」

「っ!!・・・わかったわ、こちらにユリをよこしなさい、引継ぎしだい、そちらに向かうわ」

「ありがとうございます」

それを最後にメッセージを切る

ナザリック防衛の大仕事で見方を殺めてしまうという重大なミス、

「まずいことになりましたね……」

「ユリ、むささび様をよろしく、なにかあったりむささび様が起きた場合すぐに連絡をよこしなさい」

「かしこまりました」

ユリならば二つの意味で安心できる、完璧なメイドだ、問題は起こらないだろう

・

・

・

・

「デミウルゴス状況は？」

「はい、現在配下の悪魔で確認したところ、フレンドリーファイアは完全に有効になっているようです」

「そう…防衛を見直す必要があるわね」

「それにしても、至高の恩方々に使える者が、ナザリック内で事故死…」

「っ……申し訳ございません」

目の前の悪魔を睨むが、今回ばかりは仕方がない、本来であれば許されない罪だが

「いえ、今回に関しては仕方がないわ、残念だけど、恐怖公の眷属だったのは不幸中の幸いね、それでも最終的な決定はむささび様が決めるわ、いいわね」

「…かしこまりました」

・

・

・

・

「アルベド様、デミウルゴス様、ただいま戻りました」

「お帰りセバス、どうだったのかしら？」

「それが…ナザリックの周辺は草原でした、周囲一キロに意思疎通にかかわらず、生きているものは確認できませんでした」

「沼地ではなく……草原…」

デミウルゴスが戸惑いの声を上げる

「アルベド」一体何が…」

言葉を続けようとするがアルベドに静止される

どうやらメッセージが入ったようだ

(アルベド様、ユリです、むささび様がお目覚めになりました、アルベド様を呼んでほしいと)

「わかったわ、すぐそちらにいくわ」

主が目覚めてすぐ自分を求めてくれる嬉しさに身震いするが、今はその余韻に浸っている暇はない

「アルベド?」

「むささび様がお目覚めになられたわ、私はむささび様を玉座の間にお連れします、現状の報告、そして守護者各員のお目通りもした方がいいでしょう、デミウルゴスは引き続き防衛の見直しを、セバスはヴィクティムとガルガンチュアを除いた、各階層守護者にこの話を伝えて、30分後に玉座の前まで来るようにしてちょうだい、頼んだわよ」

・  
・  
・  
・

むささびの寝室の前まで来るとノックをする

「むささび様、アルベドです」

するとユリが中から顔をだす、

「ありがとうユリ、入れ替わりで悪いのだけど、部屋の外で待っててもらえないかしら」

ユリには悪いが、やはり愛しい人と会うのは二人っきりのほうがいい

「かしこまりました」

ユリが退出するのを待って中に入る

「アルベド…近くにきて」

ベッドで横になっている主からそう告げられ、近づくと

「手、触ってもいい?」

「はい!もちろんです!」

手の感触を、温もりを確かめるように手を握られる、

「……夢じゃない」

ベットから起き上がるとGMコールをしようとするがつかない

「GMコールがつかない」

「申し訳ございません、無知なわたくしではGMコールが何か存じ上げません」

「ん、いいの独り言、アルベド?」

「はい!何でしょうか?」

アルベドに静かに抱き着くと語り掛ける

「どこにも…いかないで」

「はい、私は永遠に貴方様のおそばにいます」

「アルベドなにかすることはない?」

アルベドはいつまでもこうしていたかったが今は緊急事態だ、自分の欲望より優先するべきことがある

「むささび様、現状の報告と守護者各員のお目通りを玉座の間にて行いたいと思っております、どうか玉座の間までご足労ください」

「わかった、じゃあすぐ行こう……アルベド?」

「はい!なんでもおっしゃってください!」

「う、うん、手、繋いでもいいかな」

アルベドは嬉しさのあまり死にそうだった

「デミウルゴス、何があったのですか?」

セバスが疑問を訪ねてくる、正直言いたくはないが、情報共有は重要だ

「…ナザリック内で恐怖公の眷属がトラップで死亡しました、どうや

らフレンドリーファイアが有効になっているようです、私一人では手が足りなかったのでアルベドに来てもらったのですよ」

セバスが渋い顔をする

「それは…さようでございませうか」

「君の言いたいことはわかる、むささび様に許しを請い、これからも忠義をささげさせていただけるか」

「その心配はないと思いますよ、むささび様は非常にお優しい方、このことで貴方を強く攻めるようなことはしないでしよう」

「君から慰めの言葉をもらうとはね、素直に受け取っておくよ」

「デミウルゴスー！あんななにやらかしたの？」

「お、お姉ちゃん！そんなこと言ったらか、かわいそうだよ」

そんなことを言いながら双子のダークエルフが入ってくる、アウラ・ベロ・フィオーレとマール・ベロ・フィオーレ、ぶくぶく茶釜さまに想像された、第六階層守護者あり、着ている服装と性別が逆な100レベルのNPCだ

「そうそう守護者に泥を塗るようなことをしてすまない、むささび様が来たら一緒に話させてもらおうよ」

やりずらそうにそう告げると新たな人物が入ってくる

「あらちび助、来てたでありんすか？」

不自然に膨らんだ胸を張る吸血鬼が立っていた、ペロロンチーノ様に創造され、第一〜第三階層までという広い階層を守護する、100レベルNPC、守護者最強の彼女の名はシャルティア・ブラッドフォールン

「ゲツ…あなたまで来てたの？」

「当たり前でありんす、そちが呼ばれて第一から第三階層までの守護を任されている私が呼ばれない理由がありません」

自慢げに話し胸を張るシャルティアだがアウラも負けじと言葉を

返す

「偽乳がそんなに胸を張ってもねー、そんなに動かすと形崩れちゃうよ？毎日大変よねーそれだけ付けると大変でしょ？」

「っ!!黙りなさい!あんたなんかまったくくないでしょ!!」

「私はまだ76歳だけど、あんたはアンデット、成長しないから大変よねー」

「おんどりゃー!!!吐いた唾はのめんぞー!!!」

二人が言い争いをしていてとまた新たな人(?)物が入ってくる

「騒ガシイ、ココハ玉座ノ間、至高ノ恩方々ガ作ラレタ中デモ最モ神聖ナ場所、喧嘩ヲスルナラ、ナザリツクノ外ニイツテシロ」

「コキュートス、早かったね」

「恩方ガイラツシャルナラ、即座ニ向カウノハ守護者ナラバ当然ノコト」

そんな挨拶を交わしているとナーベラル・ガンマが入ってくる

「皆様、間もなくむささび様のご入場になります」

その言葉を聞くと、中央の絨毯を境に二つに分かれ打ち合わせでもしたかのように恩方を迎える準備が一瞬で整う

それを確認すると外から合図を受けたナーベラルが声を上げる

「むささび様のご入場です」

ナーベラルがそう告げると全員、首を垂れる、巨大な扉がゆっくりと開き、どこか居づらそうにアルベドと手をつないだむささび様が入ってくる、その右手にはスタッフ・オブ・アイنز・ウール・ゴウンが握られている、その光景はデミウルゴスにとって好ましいものであったが、失態を犯した身では素直に喜ぶことはできない、アルベドがむささび様を玉座までエスコートし座らせると、階段を降り、声を上げる

「面を上げなさい」

その場の全員が息の合った動作で顔を上げる

「では皆、至高の恩方に忠誠の儀を!」

アルベドがそういうとセバスが一步前が出る

「執事、セバス・チャン、以下プレアデス、御身の前に」

言い終わるとセバスとその場にいるプレアデスのメンバーが首を垂れる、以下全員が同じ動作だ

「第一、第二、第三階層守護者、シャルティア・ブラッドフォールン、御身の前に」

「第五階層守護者、コキュートス、御身の前に」

「第六階層守護者、アウラ・ベロ・ファイオーレ」

「お、同じく第六階層守護者、ま、マール・ベロ・ファイオーレ」

「御身の前に」

「第七階層守護者、デミウルゴス、御身の前に」

「守護者統括、アルベド、御身の前に」

「第四階層守護者、ガルガンチュア、及び第八階層守護者ヴィクティムを除き、各階層守護者、御身の前に平伏し奉る、ご命令を、至高なる御身よ、我らの忠義全てを御身に捧げます」

「あ、頭をあげてください、えっと、ありがとうございます?」

「ありがとうなどもつたない!我ら至高の恩方々に身を捧げたものたち、我ら造物主たる至高の恩方に恥じない働きを誓います!」

「誓います!」

「う、うん、ありがとう?」

そういうと階段を下りてアルベドの前に立つ

「頭を上げてください」

その言葉で一糸乱れず守護者全員が頭を上げる

「ま、まだなにが起きているかわからないですけど、皆さんの力を貸してください!」

言い終わるとむささびは守護者に頭を下げる

それに真っ先に反応するのはアルベドだ

「お、おやめください!むささび様!我ら至高の恩方に尽くすために作られた身、その創造主たるむささび様が我らの力を借りるために頭を下げるなど!!」

「そうでありんす!むしろこちらから伏して使えることをお願いするでありんす!!」

その他各員からも驚きや静止の声上がる



「あ、ありがとう、よかった、よろしくおねがいします」

むささびが言い終わるとアルベドが口を開く

「では現状の報告に移らさせていただきます、セバス」

それに答えセバスが一步前に出ると発言する

「ナザリック地表、及び周囲一キロを調査したところ、沼地ではなくすべて草原でした、周囲には人口建造物、大型生物、モンスターの類は一切確認できず、そして空には、六階層と同じ夜空が広がっております」

その場の全員が驚きの声を上げる

「夜空?」

「はい、ナザリックはどうやらどこか不明な地に転移したのと考えられます」

「そつ…か」

続いてデミウルゴスが発言する

「続けて報告させていただきます。非常事態につきまして、各階層守護者に伝令を出そうと恐怖公の眷属を使用したのですが、どうやらフレンドリーファイアが有効になっているようでした、恐怖公の眷属が一匹トラップに掛かり、命を落としました」

守護者全員の顔色が変わる

「わかった、後で恐怖公には謝らないとね」

むささびがそう言い終わり次の話に移ろうとするのをアルベドが止める

「お待ちくださいむささび様、不測の事態だったとは言え、デミウルゴスの責任下で起きたこと、罰を与えねば他の者への印にもなりません」

デミウルゴスを含めた守護者各員がうなづく

(なんでいいと言っているのに罰を受けたがるんだろう、、、前ペロロンチーノさんが怒られると喜ぶ人がいるっておっしゃってたけど、デミウルゴスがそうなのかな?)

「罰するって言っても、、その方法も思いつかなし、、それに今回のフレンドリーファイア有効はナザリック内でも誰もわからなかったん

でしょ？そのことで怒るのはおかしいよ、やっぱり罰はなし」  
「っ…かしこまりました」

デミウルゴスは黙って主の方針に従い、次の議題に入る

「次はフレンドリーファイアの確認中に判明したことなのですが、一部魔法やアイテムの効果が変わっているようです」

「それは…大変だね、何が変わったとか法則とかはわかる？」

「今の所、詳しい報告はできませんが、現在も私の階層で全力で調査中でございます、申し訳ございませんが、今しばらくお待ちください」  
「わかりました」

ひとしきり報告が終わるとセバスが提案をする

「僭越ですが、ナザリックを隠蔽なされてはいかがでしょうか、わたくしが外を見てきた限り、あたりは開けており、ナザリックが容易に発見、攻撃される恐れがあります」

「そうね、それは私も考えていたわ、でも方法はどうするの？」

「そうですね、確かに現在ナザリックには隠蔽に適した者はおりませんね」

話し合っていると意外な人物から声上がる

「あ、あのー」

「どうしたんだい？マーレ」

「た、例えば壁に土をかけて隠すとかであれば…」

「栄光あるナザリックの壁を土で汚すと？」

アルベドの声色が一気に低くなり、マーレを睨むがむささびがフオーローに入る

「い、いいよそれで！マーレを隠蔽お願いしますー！」

「むささび様、…」

やりづらい空気をデミウルゴスがほどく

「そうなる問題は上空からの視認と、山なりになるだろうから不自然になってしまい、やはりどうしても目立ってしまう、どうでしょう、周囲に同じような丘を作り、山は山の中に隠すというのは」

「そうだね、それがよさそう、マーレそのこともお願いします」

「か、かしこまりましたー！」

「上空には僕が幻術を展開しておくよ」

「至高の恩方のお手を煩わせてしまい、申し訳ございません。」

「んんーん、僕もお仕事しないとね」

一通り事が終わるとアルベドが声を上げる

「それでは現状報告、忠誠の儀はこれで終了させていただきます、むささび様はこれからどうなさいますか？」

むささびは少し考える素振りを見せる

「地表を見に行きたいな、草原と夜空を見てみたい！」

「かしこまりました、それでは私がお供いたします」

そこにシャルティアが声を上げる

「アルベドずるいでありんす！私がお供する方が安全でありんす！」

「いいえ、恩方を防衛するという任務であれば、私のほうが上よ、それにあなたはナザリツクの入口を含めた第一〜第三階層を守護しているのだから、貴方は現場を離れない方がいいわ」

アルベドの正論にシャルティアが音を上げる

「うぐぐ…わかったでありんすよ」

シャルティアが敗北を認めるとアルベドが満足そうに言い放つ

「それでは各員、至高の恩方に我らが仕事をご覧に入れなさい！」

「はい!!」

そうして各員は自分の仕事へと向かっていく、

「それではむささび様、参りましょう」

## 世界征服？

ナザリツク地下大墳墓、第一階層地表付近、むささびとアルベドは報告の夜空を確認しに来ていた

「おや、むささび様と守護者統括殿、外をご覧になりたいとこのことで？」

入口にはデミウルゴスとその配下、三魔将が警備していた

「ええ、護衛は私が、あまり長くはならないとは思うのだけど、留守を頼むわ」

「お待ちください、護衛はアルベド一人でしょうか？」

デミウルゴスの質問にアルベドが顔をしかめる

「問題があつて？」

「至高の恩方が未だ情報も詳しくわかっていない場所へと赴かれる、それは構いませんが護衛が一人というのは看過できませんね」

「問題はないわ、私は恩方の護衛であればナザリツク内に私ほど適任な人間はいないでしょうし、外にはマーレもいるわ、それ程遠くへ行くわけでもないし、例え襲撃されたとしても、むささび様をナザリツク内まで護衛されることなど容易いわ」

「それでもです、むささび様、どうか私一人でも構いませんので、お供を許していただけられないでしょうか？」

「ぼ、僕は構いません」

「僕である私の我儘を聞き入れていただきありがとうございます」

（せっかくむささび様と二人つきりで夜空のデート予定でしたのに……デミウルゴス）

やり取りを経て地表へと続く階段を上がっていく

そうして見えてきた夜空に感動の声を上げる、

「うわあ…綺麗……ブループラネットさん……これが夜空」

体を通り抜ける風が心地よく、寝転がってみるとひんやりとした草が気持ちいい

元居た世界では絶対に味わうことのできなかつた自然を存分に堪能する

夜空に手を伸ばしながらむささびはつぶやいた

「……ほんとうに綺麗、きらきら輝いてる……まるで宝石箱みたい……」  
感極まっている主人を美しい夜空には無関心に二人の僕がその横顔を悲しげに眺めていた

「この世界が美しいのはむささび様の身を飾る為の宝石を宿しているからかと、お望みとあらば、ナザリック全軍をもって手に入れてまいります」

「こんな綺麗で広いんだよ、僕一人じゃ持て余しちゃう……でもギルドのみんなとなら、、世界征服なんて面白いかもね！」

「っ！」

(ほんとに違う世界に来ちゃったみたい……みんなにはメッセージとか送ってみたけど返答なかったし、、この世界に来ちゃったのは僕だけなのかな、、でもデミウルゴスが魔法の効果が変わってたって言うたし、距離が遠すぎたりするだけなのかもしれない、なら！この世界でもアインズ・ウール・ゴウンの名前がみんなに伝わればみんなも気づいてきてくれるかもしれない!!!)

一瞬暗い顔をするむささびだったが直ぐに元気を取り戻した用に顔を上げる

「戻ろっか！ナザリックに！」

「はっ」

「ユリねえーさん、むささび様どうだったっすか？」

メイド用に与えられた一室にプレアデスが集まっていた

「短い時間だったとはいえ、至高の御方のお傍で控えることができたのはとてもよかったです」

「優等生の模範解答が聞きたいわけじゃないんすつよ？夜を一緒に部屋で過ごしてどうだったかが聞きたいっす！」

ルプスレギナのちやちやにほかのプレアデスの面々が反応する

「……………ユリ姉ずるい…」

「そんなのあるわけないでしょう、私はただアルベド様に頼まれてむさび様が寝ている間お傍にいただけです」

ユリがきりつとした声で返す

「なんすかそれ、つまんないっす、ユリ姉襲っちゃえばよかつたんすよ！」

「ルプスレギナ…それは間違いなく不敬な考えですよ」

「それでも寝顔は拝見できたのでしょうか？それだけでも羨ましいわ」

「ソリュシャンまで、でもむさび様…少し悲しげでした、お傍に控えることができたのはとても嬉しい限りなのですが…」

やりずらくなつた空気をすぐさまルプスレギナが霧散させる

「それでも羨ましいっすねえー、ああ私たちも早くお仕事が欲しいっすー」

「安心してみんな、すぐ忙しくなるわよ」

ナザリック大墳墓、第九階層の執務室でむさびはアルベドから渡された報告書の山に目を回していた

「アルベド…これはどういう意味？」

難しい言葉で書かれた報告書もそうだが、これだけ短時間で山のような報告書を作れるアルベドの能力はすごい

「こちらは、ナザリックの経費削減計画です」

「経費削減？」

「はい、現在ナザリックでは資金確報の方法が確立されておりません、その為ナザリックの防衛方法を見直し、資金調達ができるまでは、コスパを優先したいと考えております」

「でも、それってナザリックの防衛能力が落ちるってことじゃ…」

「こちらは長期で考えております、様々なアイテムや魔法の使用が変わったことも考慮して、味方には害のないように、そしてお金をかけ

ず、極力防衛能力も落とさない形で実現していく予定です」

アルベドと共に控えているセバスに意見を求める

「セバス、どう思う？」

「わたくしの意見でよろしければ、先ず、最重要すべきはナザリックの維持でございましょう、あくまで防衛能力を落とさない形であれば防衛の見直しも必要かと」

「うん、わかった、ありがとう、それじゃあ許可するね」

セバスがお辞儀をするのを見て、アルベドが用意してくれた了承の判子ぽんつと押す

「それと資金獲得方法についてなのですが、現在でも草案は様々あるのですが取り合えずはナザリック周辺の情報を集めなくては始まりませんので、ナザリック周辺の調査の許可をいただきたいのですが」

「それならいい方法があるよ！」

そういつて自分のアイテムボックスからあるアイテムを取り出す

「それは…ミラー・オブ・リモート・ビューイングでございませうか？」

「うん、ユグドラシルではもう使わなかったけど単純なマップ埋めになったら使えるはずだから見てみよっか」

ミラー・オブ・リモート・ビューイングを起動するとナザリックの外が映し出されていた、外は既に明るくなっていた、どうやら執務に夢中になって時間がかなり過ぎていようだった

「あれ？明るくなってるね」

「はい、すでにむささび様が執務を始めてから4時間が経過しています」

「そんなに経ってたんだ！びつくりだね」

そんなやり取りをして操作しようとするが

「ユグドラシルと操作方法が違うみたい…どうやって動かすのかな…」

鏡の前で手を広げたり、ジャンプしてみたりするが動かない

「むささび様よろしいですか？」

「うん、」

アルベドが鏡に近寄ると命令する、

「ミラー・オブ・リモート・ビューイングよ、動きなさい」

「……………動かないみたい」

(鏡に命令…意外とおつちよこちよいなのかな?)

しばらく試しているとコツをつかんだようでミラー・オブ・リモート・ビューイングからぴっぴつという機械音がすると自由に動かせるようになる

「やった!動いた!」

後ろから拍手が聞こえてくる、

「おめでとうございます、むささび様」

「流石は至高の恩方であらせられるむささび様!流石です!」

(鏡動かしただけで、ベた褒めだ!)

「う、うん、ありがとう」

鏡を使って周囲を調べていると村を発見する

「あ、村がある、お祭りしてるのかな」

村を発見するがなにやら村は活発に人が動いていた

「いえ、これは違います」

よく見てみると、騎士が村人らしき人たちを襲っているのが見える

「お、襲われてるの?」

「下等な人間同士の殺し合いなど…くだらない」

(誰でも楽々PK術には情報がわからないうちは戦闘しちやだめって書いてあったけど…)

「どうなさいますか?むささび様」

問いかけに振り替えるとセバスに真っ白い鎧の騎士の面影を見る

「タツチさん……………」

(っ!!)

セバスは驚くが反応には出さない

「困っている人を助けるのは当たり前…ですよ、助けにいきましょう!」

「お待ちくださいむささび様!相手の情報が致命的にかけています!相手の強さも伏兵もわからぬ状態です!それに村を襲っているのはおそらく野党ではなく国か何かに属している者たちでしょう、この世界のパワーバランスもわかっていない状態では危険すぎます!」



「それでも、この村の人たちは今殺されてるんだよ?」

「ですが! 恩方々のあん「アルベド様」

さらに反論を返そうとするアルベドをセバスが止める

「誰かが困っていたら助けるのは当たり前、これはタッチ・ミー様のお言葉です、そして、造物主の願いを聞き届けるのも配下としての務めではありませんか?」

「っ…わかりました、それではこのアルベドを護衛としてお使いください……」

「うん! 行こう!」

「むささび様お待ちを、セバス、ナザリックの警戒レベルを最大まで引き上げるよう、デミウルゴスに指示を、次に後詰の準備よ、隠密行動に長けた僕を複数送り込みなさい、それが終わったらゲートを使って村まで来ること、いいわね?」

「かしこまりました」

やり取りを終えるとアルベドが黒い炎の様な物に包まれ、出てきたときには真つ黒なフルプレートに身を包んでいた

「参りましょう、むささび様」

「わかった! ゲート!」

カルネ村の村娘、エンリは妹を連れて騎士から逃げていた、

朝の日課の水くみをしようとしていたら、村がいきなり襲われたのだ、

急いで家まで走って戻り妹のネムを連れて逃げようとしたところ騎士に襲われるが、お父さんが騎士に飛び掛かり助けてくれたのだ、父の言葉に従い森まで走る、後ろから聞こえてくる父の悲鳴に思わず振り返りたくなるが、どうにか抑え込んでネムを連れて森まで走っていた、

「はあ、はあ、きやあ!!」

騎士に背中を切られ、その場に倒れこんでしまう

「手こずらせやがって」

騎士が剣を振り上げるのを見てネムを庇うように抱く

「ドラゴン・ライトニング!!」

・  
・  
・  
アルベドと一緒にゲートをくぐると騎士が女の人に剣を振り下ろす寸前だった、

とつさに攻撃魔法を発動する

「ドラゴン・ライトニング!!」

ドラゴンの形をした雷が騎士の体を貫通し、容易にその命を刈り取る

人が焦げる臭いが辺りを満たす

「な、なんだお前たちは!」

とつさに魔法を撃ってしまった、一応手加減はしたが、自分の魔法を受けた人間は間違いなく死んでいる、人の焼けた臭いが鼻を強く刺激する

「残りはどうしますか?」

語り掛けてくるアルベドにもたれかかる、言葉を返す余裕がない、目の前が暗い、人を殺した感覚が重くむささびにのしかかっていた  
それを見たアルベドが瞬時に残り二人の騎士の首を跳ねる、

「むささび様?気分がすぐれないようでしたらナザリックに帰還しますか?」

「だ、大丈夫」

しばらくは罪悪感の余韻が残っていたが、すーっと消えていく、  
アルベドから離れ、むささびは怪我をしている村人のそばによる  
「け、怪我してる、これ飲んでください」

そういうとアイテムボックスから取り出した赤いポーションを渡す

「これは…」

「治癒のポーションです、たぶんこれでよくなると思います」

そういわれポーションを飲と村人の傷がふさがっていく、

「うそ…」

そこにセバスがゲートを使ってやってくる、

「お待たせしました、むささび様、顔色が悪いご様子、大丈夫でしょうか？」

「大丈夫、ありがとう」

そこに村人が話に入ってくる

「あ、ありがとうございます！お願いします父を！村を助けてください！！お願いします！」

二人が土下座して頼んでくる

「わかりました、助けます」

うなずき返すと二人に魔法をかける

「アンティライフ・コクーン、ウォール・オブ・プロテクションフロムアローズ、この円の中にいたら安全だよ、それとこれ」

アイテムボックスから二つの角笛を取り出し二人に渡す、

「それを吹くとゴブリンが出てきて助けてくれるよ、じゃあ、僕たちは村まで行ってくるね」

「お願いします!!」

・  
・  
・  
・

「セバス、お願い」

「かしこまりました」

お辞儀をするとセバスは騎士に向かって走り出す、1000レベルのモンスクの動きに対応できるものなどおらず、次々に頭だけをつぶされていく

「それにしても弱い、伏兵が本命にしてもこれはあまりにもお粗末ね」  
「でもなんで村を襲ってたんだろう、見た感じこの村はあんまりいいものがあるようには見えないけど…」

「恐らく国力の低下や、迎撃部隊を狩る為に行っているのでしょう、セ

バスに命令して何人が生け捕りにしますか?」

「そうだね、その方がよさそう」

「セバス! 何人が生け捕りにしなさい、情報が必要よ」

「かしこまりまし、たっ!」

セバスはペースを上げて仕事をこなしていく

「終わりました、むささび様4名捕虜といたしましたがいかがないさ  
ますか?」

「捕虜はナザリツクに送った方がいいでしょう、村人に殺されても面  
倒だわ、それでよろしいでしょうか?」

主から返事がない、暗い顔をして俯いている、

「むささび様? むささび様? 大丈夫でしょうか? やはり一度ナザリツ  
クに帰還されては…」

その問いに顔を上げ明るい声で返す、

「大丈夫、大丈夫、村の人と話さないとね」

「はい…」

村長と話すと様々なことが分かった、  
話は基本アルベドが進んで話してくれたので特に問題は起きな  
かった

アルベド最初対価を要求した、だが元々善意で助け、襲われたばか  
りの村に対価を払う余裕はないだろうと反対したが対価とは情報の  
ことだった、それなら村に負担は掛けないし、対価を要求すれば余計  
な詮索をされずに済むという事まで考えてのことだった、やっぱりア  
ルベドは凄い。

長年こもって研究をしていたマジックキャスターいう事で、世界情勢に疎いためにこの周辺のことを教えてほしいと頼み村長は気兼ねよくこの辺りのことを教えてくれた

「どうやらナザリックとこの村はリ・エステイーズ王国という国の領土らしい、

そしてリ・エステイーズ王国は、バハルス帝国とよくケンカをしているらしく、今回村を襲ってきたのもバハルス帝国の騎士たちらしい、

そんな形で周辺の情報をすらすらと聞き出しているアルベドの姿はかつこよかった

でも、、人を殺してしまった、その後もセバスに命じて騎士の大半を殺してしまった、最初のドラゴン・ライトニングで殺した人間にはかなりの罪悪感を感じ、立ち眩みのようなものも感じた、それでもすぐに持ち直し、今はそれはない、これは竜人になった結果なのだろうか、、

そんなことを思っていると村長の家にセバスが入ってくる

「お話し中の所申し訳ございません、村に騎士風の男たちが近づいているようです、いかがなさいますか？」

アルベドがこちらに顔を向けてくるので頷く、交渉などはアルベドに任せた方がずつといい、

「村長さん？申し訳ないのだけど、手伝っていただけますか？」

・  
・  
・

「馬上より失礼、私はリ・エステイーズ王国、王国戦士長、ガゼフ・ストロノーフ、この近隣を荒らしまわっている帝国の騎士を討伐するため、王のご命令を受け、村々を回っているものである」

「王国戦士長……」

ガゼフは周りを見渡す、すでにこの村は襲撃を受けた後の様だ  
警戒を強め、強めの口調で村長に尋ねる

「この村の村長だな？後ろの方々は一体だれなのか、教えてもらいたい」

「そ、それには及びません、僕はむささび、この村が襲われてたので助けに来たマジックキャスターです」

アルベドに言われた通り挨拶を交わす

かなり怖い顔をしているがアルベドもセバスもいる、大丈夫だろう  
王国戦士長は驚いた顔を見ると馬から降り感謝を述べてくる

「この村を救っていただき感謝の言葉もない！」

「れ、例にはおよ「戦士長！」

緊張しながら言葉を返そうとするがそれを後ろの騎士が割って入る

「周囲に複数の人影、村を囲むような形で接近しつつあります！」

・  
・  
・  
・

むささびとガゼフの一向は村の倉庫から村を取り囲んでいる敵を眺めていた

(アルベドが戦士長がどういう話をするか言ってたけど当たるのかな？)

「あれは…アークエンジェルフレイム？」

「あのモンスター？をご存じなのか？」

「は、はい、一応、第三位階魔法で呼び出せる、天使です、あの人は何者なんですか？」

「第三位階、、それだけのマジックキャスターをこれだけの量揃えられるとなると、スレイン法国、それも神官長直轄の、特殊工作部隊、六色聖典のいずれかだろう」

「え？それじゃあさつき村を襲ってた人達は…」

その疑問にアルベドが答える

「恐らく、スレイン法国が偽装の為に行ったものでしょう」

「でもアルベド？この村はそんなに大事な場所なの？」

「それなら、狙いは私だろう」

「え？戦士長さんが狙われてるんですか？」

（じゃあ、スレイン法国がバハルス帝国のふりをして、リ・エステーゼ王国の戦士長を狙った？、、難しい、、）

考え事をしてしていると戦士長が愚痴をこぼす

「本当に困ったものだ、まさか帝国だけでなく、法国からも狙われているとは」

（なにか、狙われるようなことしたのかな？）

戦士長は少し考える素振りを見せるとこちらに向き直り口を開く  
「むささび殿、よろしければその御仁をお貸しただけですか？」

戦士長はそういうとセバスを見る

「見たところ、私以上の：かなりの実力者とお見受けする、重ねてお願  
いする、その御仁をお貸しいただきたい、報酬は望む額をお約束し  
よう」

自分たちの隊長、周辺国家、最強の戦士よりも強い御仁と聞き、ガ  
ゼフの部下が動揺を見せる

（これがアルベドの言ってた勧誘？断らないといけないんだっけ、、）

「それは：ダメ、かな」

「そうか、であれば王国の法で強制徴用というのは？」

「チツ、調子に乗るなよ下等「アルベド！」」

アルベドが今にも戦士長の首を跳ねそうなのを制止する、

そこにセバスが話に入る

「それはやめた方がよろしいでしょう、それにあなたは堅実な方だど  
お見受けします、それに村を救ったものに対しその場で強制徴用とは  
あまり聞こえのいい話でもございませぬ」

戦士長はしばらく考えた素振りを見せるとむささびの手を握る

「わかった、ではむささび殿お元気で、この村を救っていただき感謝す  
る、本当に感謝する！そして我儘を言うようだが、もう一度村を守っ  
てほしい、今差し出せるものはないがなにとぞ！なにとぞ！」

そうして戦士長は地面に頭をつけてお願いしてくる、

そこへセバスが声を上げる

「戦士長殿お顔を上げてください、主人に許可を取ってからではあります、できることなら私が村人を守るとお約束しましょう、よろしいですか？」

セバスに向かつて首を縦に振る、

それを見た戦士長は立ち上がり深いお辞儀をして感謝の言葉を述べる

「本当に、ありがとうございます！」

「えっと、それじゃあこれをあげます」

むささびは事前にアルベドに言われ用意していた木彫りの像を取り出し戦士長に手渡す

「君からの品だ、ありがたくいただきます、では」

「ご、ご健闘を」

そして村から出ていく戦士長を見送った、

・

「アルベドすごい！なんであの人のする事がわかったの?!」

むささびの暗い表情は影を潜め、無邪気な賞賛に気をよくしながらアルベドが答える

「村には最初からほとんど価値がないのはわかっていました、国を衰退させるために行われた工作かとも思いましたが、王国戦士長が現れたことで戦士長が狙われていることがわかりました、つまり戦士長は村に入った状態で罠にかかったわけです、つまり敵はあの戦士長よりも戦力が上、負けそうな状態になれば戦力をどうにかして上げたいと思うでしょう、そうすればセバスを勧誘してくると思っただけです」

「あの木彫りの像は？」

アルベドが少し笑うと言葉をつなげる

「王国に価値があるかはわかりませんが、一応恩を売っておければと思います、戦闘が始まったら観戦し、相手の戦力がわかり、あの戦



士長がピンチになったら助けます、そうすれば戦士長はむささび様に恩義を感じるはずです、人間ごときではありませんが有権者、王とコネクションを持っているとのことだったので一応ではあります」

「アルベドすげえねー」

(くふふっ！むささび様にいい所を見せられたわ!!)

「いえーこれくらいむささび様の為ならもつとすげえいいことも！」

服に手をかけるアルベドにセバスが横に入る

「アルベド様、タイミングを伺うのであれば戦いをご覧になっていた方がよろしいのではないのでしょうか」

「…そうね、そうしましょう」

カルネ村付近の平原、王国戦士長、ガゼフ・ストロノーフは絶体絶命の危機に陥っていた、

自分の連れた兵は8割がすでに戦闘不能、死んだ者こそ少ないが、処置をしなければ時間の問題だろう、加えてアークなんとかフレイムとやらの波状攻撃により体力は削られ、ボロボロに傷つき、既に満身創痕といった状態だった

そこへ天使が更に襲い掛かる、天使数体であればガゼフ一人でも捌き切れただろうが、既に10体を超える数がガゼフを取り囲んでいた、

更に攻撃しては退避し、しかも退避ざまにマジックキャスターから攻撃魔法が飛んでくる

ガギンツ!!ガギンツ!!

攻撃魔法が鎧に当たるが、威力を殺し切れずガゼフにダメージが蓄積されていく

口からどす黒い血が流れる

休む間もなく天使たちの波状攻撃が再開される、

正面からくる天使を迎撃次いで右、左左、右、後ろ、だがついに脇

腹の鎧の隙間に深々と剣を差し込まれる

「ぐはあああー！」

思わず地面に頭から倒れこむ

それを見た敵の指揮官らしき者から声があがる

「止めだ、だが一体でやらせるな、数体で確実にだ」

体力などもうない、勝算もない、聞こえていた部下の抵抗する音もいつしか聞こえなくなった、だが、それでも

「な、なめる、なああああああ!!!」

歯を食いしばって、力の入らない体に入れて、立ち上がり剣を構える

「俺は王国戦士長!!この国を愛し!守護する者!!!王国を汚す貴様らに!!負けるわけにいくかあああ!!!」

「その体で何ができる?ガゼフ・ストロノーフ、立てたことは賞賛しよう、貴様が人類の守り手として戦ったなら幾人の人間が助かったことか、だがお前はここで殺す、その後には村人達も、人類の存亡の為だ、無駄なあがきをやめ、大人しくそこで横になれ、せめてもの情けに苦痛なく殺してやる」

「ふっ…あの村には俺より強い御仁がいるぞ……」

「張ったりか?」

その時ガゼフの脳内に声が聞こえる、

(そろそろ交代ね)

気が付くと周りの部下と共にどこか別の場所に飛ばされていた

「ふっ、はっ…」

ガゼフに気が付いた村長が説明する

「ここは村の倉庫です、むささび様が魔法で防御を張られています」

「む、むささび殿は?」

「それが、戦士長様と入れ替わるように姿が掻き消えまして…」

むささびからもらった木彫りの像を取り出すと同時に同時に光の粒になって霧散する、

それを見たガゼフはすべてを悟り、気絶した

陽光聖典隊長、ニグン・グリッド・ルーインは困惑していた、  
任務達成を目の前にして、目の前にいたはずの目標が一瞬にして消  
失、代わりに子供を含んだ三人組がガゼフの立っていた位置にいたの  
だ、

「何者だ…」

「は、初めまして、スレイン法国の皆さん、ぼ、僕の名前はむささびで  
す、よろしく願います」

明らかに場違いな少年が自己紹介をしてくる、

「…ガゼフをどこへやった？」

その疑問にあっさりと答えが返ってくる

「村の倉庫に、酷いけがだったから治療してもらってるはずですよ」

「なるほど、村人の命乞いにも来たのか？それならば「違います」

「帰ってください」

話を遮られ下された要求は帰れ、だ、余りにも無頓着で笑ってしま  
いそうだな

この感じでは倉庫にいるというのも嘘ではないのだろう

「駄目だ、ガゼフを殺し、村人たちも殺す、貴様らも大人しくそこに横  
になれ、そうすれば苦しまずにころして」

目の前の喋りかけていた少年の前に、瞬間移動でもしたかのように  
後ろに控えていたはずの黒いフルプレートの女が立っていた

頬に水滴が飛ぶ、生暖かいそれを血と気づくのにそう時間はかから  
ない

「なにが…起こった？」

水滴の飛んできた方向を見ると、頭部のない部下がちようど倒れる  
所だった、

恐らく攻撃してきたのは黒いフルプレートの女だろう

「ひっ、ひいひいひい」「一体何が起こった！」「うっ、うわあああ」

部下が混乱しているこのままではまずい、

「むささび様、やはりこいつらに生きる価値はありません、早々に殲滅されるのがよろしいかと」

「お話し合いができないんだもんね、しょうがないね」

目の前の集団は一切動じる様子すら見せない

異様な光景だ、

だが負けるわけにはいかない

「落ち着け！天使たちを突撃させよ！」

隊長からの指示に部下たちが素直に応じ、三人組に向かって天使たちが突撃する

そしてその少年の腹を剣が深々と突き刺さった、かのように見えたが

「上位物理無効化、ユグドラシルだと使う機会が全然ないパッシブスキルなんだけど…」

「この様な下劣な攻撃ではむささび様には傷一つ付けられないという事ですね」

話し終わるとむささびは自分の腹に剣を突き立てている天使二体の手をつかむと振り回した、一見子供が喧嘩しているようにも見えるがその筋力はマジックキャスターとはいえ100プレイヤーにふさわしいものだった

「それっ!!」

振り回した勢いに乗せて天使二体を地面に叩きつけると天使はその存在を維持できなくなり崩壊した、

「馬鹿な！」「ありえない！何かのトリックに決まっている！」

再びニグンの部下が混乱し始める

「落ち着け！全天使で攻撃を仕掛けろ！急げ!!!」

その声に導かれるように部下たちはすべての天使を突撃させるが、  
「アルベドお願い」

「はっ」

アルベドがバルディッシュを振るい、ひと薙ぎで殲滅するが、ニグン達陽光聖典のメンバーにはバルディッシュの動きを捉えることはできない

ただ突撃させたすべての天使が殲滅されたことは召喚者には理解できた

「あ、ありえない…」

部下たちは一心不乱に三人組に対して様々な魔法を撃ち放つ

「チャーム・パーソン！」「アイアン・ハンマー・ライチヤスネス！」

「ホールド！」

多種多様な魔法が雨あられと降り注ぐ中三人組は動じることはなかった

精神的な動揺もそうだが、回避も防御にも一切文字通り動くことはなかった

「ユグドラシルの魔法ばかりだね」

「やはり、魔法はユグドラシルで使われていたものがそのまま使われているようですね」

「でもガゼフは変なスキル使ってたね」

「そうでしたね、発動前に確か、武技などと言っていました、調べますか？」

「うん、じゃあアルベドそろそろ、」

「かしこまりました」

アルベドが主人から命令を受けるとニグン達に向かってバルディッシュを振りぬく

「ひっ、ひいひいひい！」

ニグンの部下がスリングを取り出し礫をアルベドに向かって投擲するが礫は投擲者の頭を知覚できない速度でつぶした

「またも反応できないレベルの攻撃を受ける」

「これ以上何かさせるわけにはいかない！そう思い攻撃を開始する」

「プ、プリンシパリテイ・オブザベイション！かかれ!!」

今まで微動だにせず戦場を眺めていたフルプレートに身を包んだ天使がその手に握られたメイスを振るおうと前に出てくる

「アルベド、下がって」

大天使は一気にむささびまでの距離を詰めるとその勢いに乗せ光り輝くメイスをむささびへと振り下ろしす

むささびはそれを右手で受け止める

「やっぱり上位物理無効化を突破できなきや戦いにならないなね  
『チェイン・ドラゴン・ライトニング』」

むささびが詠唱すると手からのたうつ龍のごとき白い電撃が生じ、  
辺りを白く染め上げる、大天使の全身を龍が巻き付くように覆い焼き  
尽くし

魔法が発動し終わると周囲には異様な静けさだけが残った  
だがその静けさもニグンの怒号によって破られる

「あ、ありえるかあああ！上位天使がたった一つの魔法で滅ぼされる  
はずがない!!!」

隊長の同様に部隊はさらに混乱していく

「二、ニグン隊長、私はどうすれば…」

「か、神様ああ」

そこへニグンから活が飛ぶ

「じ、時間だ！生き残りたかったら時間を稼げ!!」

そう命令を出すと継るように懐に手を伸ばし、アイテムを取り出  
す、

「最高位天使を召喚する!!!」

もはや士気は落ちる所まで落ちていた、いつ部隊が瓦解してもおか  
しくはないが、最高位天使の名を出すことで何とかつなぎとめる

「あれは確か…超位魔法以外を封じ込められる魔封じの水晶?」

そしてその水晶が破壊される

「見よ!!最高位天使の尊き姿を!!ドミニオン・オーソリテイ!!!」

辺りが光に照らされ、光り輝く翼の集合体が姿を現す

「あれ?」

その威光を前にニグンを含めた陽光聖典全員が感動に打ちひしが  
れていた

「この天使が最高の切り札?」

「そうだ！これこそが最高位天使の姿だ！お前たちにはこの宝を使う  
だけの価値があると判断した」

むささびは呆れた様子で感極まっている陽光聖典を眺めていた

「アルベド、もういいよ」

特殊能力による魔法威力増強がされているようだが、このドミニオンはむささびに興味を失わせるには十分だった

「つつ!!!ホーリースマイトを放て!!!」

ニグンが己の不安をかき消すようにドミニオンに命令を下す

ドミニオンの手にある王笏が砕ける

だが御方の防衛に対して完璧なアルベドはそれを許さない、

ドミニオンまで一気に接近し、ドミニオンの翼の体を中央から一気に叩き切る

ドミニオンは真ん中から切り裂かれあつけなく光となって霧散する

笑ってしまうほど簡単に、そこには何もいなくなる

ドミニオンの光輝が消え、周囲の光量が一気に落ち込む

「お前たちは…一体何者なんだ……」

ニグンは力なく尋ねる

「お前たちのような存在は…いちや、いちやいけないんだ……」

それはもう気力をなくし自分に言い聞かせているようだった、

そこへむささびが暗い表情で疑問を問いかける

「ねえ…アインズ・ウール・ゴウンって……知ってる?」

「そんな名前!聞いたこともない!!!」

ニグンは怒りに任せ、怒号で返す

「そっか、じゃあ……」

・  
・  
・

風と草の気持ちいい草原で二人で座っていた、むささびはアルベドに寄りかかる

アルベドは黙ってそれを受け入れてくれる

辺りは既に日が落ち始めていた、村ではセバスが事後処理を行って  
くれているはずだ

「むささび様の？これからどうなさいますか？」

静かな草原にアルベドの美しい声が響きわたる

その声はとても気持ちいい

「みんなを…捜しに行こう……」

自然が心地よくて、アルベドの音が、温もりが心地よくて、夢うつつにこたえる

「…かしこまりました」

ほんやりとした意識の中で沈んでく夕陽を眺めながらつぶやく

「もう、くらくくなるね…かえろう…なぜ、りつくに……」

素晴らしい終わるとむささびは完全に夢の世界に入ってしまった

「ええ…帰りましょうナザリツクに……」



## 白昼夢

辺りは日が落ちはじめ、傾いた太陽からオレンジ色の光が照らされ、辺りを染めいていた。

むささびはアルベドの腕の中で夢うつつに揺られ、

自分を運ぶその人の顔は茜色に染まり、とても美しかった。

呼ばれている気がする、どこから呼ばれているのかも、それが声なのかもわからないが、理由もなくそちらに意識を傾ける……

鈴木悟は母親の入った驚くほど質素な棺桶を死んだ目で見つめていた、

死因は過労だった。

葬儀の参列者も非常に少なかった、むしろ葬儀を開けたことに感謝すべきなのだろう、アークロジューに住む親戚が本来であれば、業者に回収されていくだけだったはずの遺体を火葬しお墓まで用意してくれたからだ

自分を育てるために必死に搾取されようとも働いてくれていた。

そこには恨みも、憎しみも、怒りさえもなかった、ただ絶望的な悲しみだけが少年の感情を支配していた。

「入りなさい、ここが新しい君の家だ」

富裕層の遠い親戚に引き取られ、案内された家は驚くほどきれいで、清潔に保たれていた、その部屋は白を基調としており、母親と住んでいた部屋とは運例の差だ

「大丈夫、ここからは私たちが君の親だ、何かあれば何でも言いなさい」

そういうとおじさんは部屋を後にする

悟の絶望に染まった表情は豪華な部屋を前にしても変わることはなかった

・  
・  
・  
・  
親戚のおじさんに引き取られて以来、用意された食事を食べるだけの絶望の中をただ生きていた悟だったが、見かねたおじさんが、お前には何かやる事が必要だと用意してくれたゲームを半ば強引にプレイさせられていた。

チュートリアルもなく、キャラクタークリエイイト画面に進み、わけもわからないまま、プレイしていた。

空が赤い、赤黒としたもの物騒な空だ

プレイ前に教えてもらった綺麗な自然の世界とはかけ離れている、むしろ現実世界の空に近い

いきなりわけもわからず攻撃を受け、何もすることができないまま地面に倒れこむ

「こいつほんとに異業種か？」

自分を取り囲む人間たちが言葉を発する

「確かだよ、竜人って見た目は完全に人間だからな」

「にしてもろくな抵抗もしてこなかったな、生まれたてか？」

「ふーん、じゃあさっさと止め刺しちまえよ」

「異業種が、人間の振りなんてしてんじゃねえーよ」

そう言い放つと、人間は振り上げた剣を無造作に振り下ろそうとする、が……

自分を取り囲んでいた人間たちは撃破エフェクトと共に霧散する  
「……貴方は？」

恐らく自分を助けてくれたであろう、純白の聖騎士。

このゲームのことは何も知らないが、ただかっこいいとそう思った  
「誰かが困っていたら！助けるのは当たり前!!」

正義降臨と書かれた派手なエフェクトを背後に決めポーズをとる

聖騎士

彼に導かれるまま間に異業種のワールドへと足を運ぶのだった

「あれ？ たっち・みー……そっちは？」

ピンク色のスライムがこちらに気が付き近寄ってくる

「ああ、ちよつと用事で、隣の烈火のワールドまで行ってたんだが、そこで異業種狩りに会っていたみたいでね、助けたんだが……どうやら生まれたてらしい」

そこへ忍者の格好をした人物が話に入る

「あそこは初心者じゃ入る事も出来なかったはずだろ？ 生まれたてをそこに放り出すなんて……またバグか、クソ運営！」

たっち・みーと名乗った銀色の騎士は不満を漏らしながら入ってくる忍者に苦笑いをしながら挨拶を交わすと二人の人物を紹介してくれる

「紹介するよ、ぶくぶく茶釜さんに、式式炎雷さんだ」

「よろしくねー」

「そういえば名前をまだ聞いてなかったね、名前はなんていうんだい？」

助けてもらった人に失礼はできない、頭を下げて自己紹介する

「…むささびって言います…よろしくお願いします」

「声っ若!!」

三人は驚愕の声を上げる

何しろ目の前の竜人は身長は170cmほどあり、顔はとてもいいとは言えず、むしろ不細工な方だったからだ、

「え？ 君…むささび君？ はー、何歳なの？」

ピンク色の肉棒が訪ねてくる

「きゅ、9歳です…」

「まじかよ!!」

全員が声を合わせて驚くコントの様な状態になっているとそこへ  
バードマンが騒ぎを聞きつけてやってくる

「おー？なんだなんだ？盛り上がってるなあー」

さらに続々と多種多様な人？物がやってきては、竜人の年齢に声を  
揃えて驚きの声を上げるのだった

・  
・  
・  
・

「うん！こんな感じでいいんじゃないかな！」

ピンク色の肉棒…ぶくぶく茶釜はコンソールのキャラクター作成  
画面を眺めて満足そうに語る。

「いい出来じゃん、これなら声と外見のミスマッチ感がなくなるけど  
…これ姉ちゃんの癖が混じってないか…？」

横からコンソールを覗いているペロロンチーノは姉に冷たい視線  
を送る

「黙ってる弟、むささびくん、こんな感じでどうかな？」

ぶくぶく茶釜がペロロンチーノさんに話しかける時とは全く違う  
声色で話しかけてくる

「あ、ありがとうございます」

あまりにもむささびの外見が酷かった為、ぶくぶく茶釜がキャラク  
リを一からし直しているところだった、クランのみんなとも顔合わせ  
が終わっていたが、170cmの竜人から年齢が一桁の男の子の声はあ  
まりにも不自然だった

「それじゃあ、反映するねー」

そうしてぶくぶく茶釜がコンソールの決定ボタンを押すと、むささ  
びの体浮き上がり、光に包まれていく、わずかな時間光に包まれると  
すーっと地面に降り立つ。

自分の手を見ると体が小さくなったのがわかる

「「お」」

みんなから関心の声があがる、声年齢相応の可愛らしい中性的な少

年がそこにいた

「あ、ありがとうございます！」

自分の体を作ってくれた茶釜に感謝を述べる

(これやっぱり姉ちゃん性の癖が入ってるよな?)

(え?その話僕に振ります?)

「そこ、聞こえてる」

「な、何でもないです」

そこへ聖騎士が提案をする、

「よし、形は整ったし!みんなで初心者育成!もとい子育てに行きましよう!!」

・  
・  
・  
・

初心者育成の基本のきが終わり、むささびはログアウトした後の事

「むささびくんの印象はどうでした?」

たち・みーはメンバーに尋ねる

「うーん、まあ完全な初心者って感じで、正直サブ垢とかそっちの気配はしなかったね」

「そうじゃなくて聞きたいのは人格とかそっちの事でしょ?、でも、なんていうか、暗かったというより闇抱えてそうだった…」

「まあこんな世の中ですからね、正直誰もが闇を抱えてるって言うても過言じゃないと思いますよ?」

たち・みーは少し考えた素振りを見せると皆に提案する。

「確かに暗い子ではあったけど、あの子に、楽しいって言葉を知らなそうな子に、ゲームの中でぐらい親切にしてあげたい、楽しんでもらいたい、私はそう思ってる…」

少しの沈黙が続く、ぶくぶく茶釜が口を開く

「元から異業種狩りを狩る、善をする事を目的としたクランなんだし、いいんじゃない?社会人であることってのも特にこれといった特別な理由があつたわけじゃないし…それにクラン長はたち・みーさん

だよ、私はたっちさんが決めた方針に従うよ」

ウルベルトも思うところがあるのか、今回は何も言わない

「それに次もやる約束はしたけど、ログインしてくるかはあの子次第だしね、ログインしてくるようだったら暖かく迎えてあげるのもいいんじゃない?」

「そうですね…ありがとう、それじゃあ今日はこれでお開きだ、みんな集まってくれてありがとう」

・  
・  
・  
・

次の日…むささびは特にすることもなく、何かしていないとおじさんに怒られそうなので、ユグドラシルを仕方なしに起動する。

ログイン画面から進むと最後にログアウトしたナインズ・オウン・ゴールの拠点、留置所だった

「あつむささびくん、来たんだ!」

声のする方に振り替えるとそこにはピンク色の肉棒が立って?いた

「…あなたは」

「忘れちゃった?ぶくぶく茶釜!」

「…ごめんなさい」

名前を忘れられたことを気にも止めず笑いかけてくれる

「昨日は確かみんなでチュートリアルやったんだねー、そうだから私から色々教えたげるよ」

スライムに強引に手を引かれ倉庫のような場所に連れてこられる

「むささび君はどんな職業するか決めてる?」

「職業…ですか?」

「そう、例えば私はマジックキャスターこういう魔法を使えるの」

そういうと茶釜は手から少しの炎を見せる、むろん室内で使用しても問題ない魔法だ

「ほかにも剣を振るったり、まえ忍者の恰好した人いたでしょ?あん

な感じで忍者になれたりもするの、こんな剣もあるんだよ」

茶釜は箱の一つから冷気を放つ刀を取り出し、自慢げに見せてくる  
むささびは少し考えると答えをだす

「…じゃあ魔法使ってみたいです…」

「わかった、それじゃあこれから」ん？むささび君に茶釜さんこんな所で何を？」

やってきたのはぷにっと萌えさんだった

「ぷにっと萌えさん、今むささび君がログインしてきたから昨日の続きでことでどんな職業とクラスを取りたいか聞いてるところなの、むささび君マジックキャスターやりたいって」

「そっかー」

ぷにっと萌えはむささびに近づくと胸を張って語り始める

「いいかい？むささび君、戦いというのは情報が命なんだよ、どれだけ強かろうと、いかにワールドチャンピオンの称号を持っていようと、情報を軽視したら勝てない、絶対に負けてしまう、つまり戦いというのは始まる前に終わっているんだよ、だから君は情報系を「それは貴方が欲しい能力でしょ」

「ばれましたか」

「むささび君は好きな職業になっていいんだよ、うちのクランは基本どんなビルド組んでも大丈夫だから」

「…それでいいです…」

「だよね！やっぱり情報系がいいよね！」

「いいの？むささび君…」

「…はい、これで…これがいいです…」

「あ、あー…よしっ！それじゃあ私が教えてあげよう!!」

「到着ー!!情報系とはいっても、最初は魔力系から取得する必要があるからまずはそっちから取得しようか！」

ぷにっとなえとぶくぶく茶釜に連れられ初心者向けの低難易度ワールドに足を運んでいた。

初心者向けといっても人間や亜人を選んだ人がスポーンする、人間向けワールドだった為、ぷにっとなえとぶくぶく茶釜は人間に変身していた。

そのワールドは初心者が最初に始めるワールドという事もあり、烈火のワールドともクランの留置所があるワールドとも一変した、自然豊かな場所だった。

草木が颯爽と生い茂り、近くには小川が流れ、少し行ったところには森が見える、青い美しい夜空からは太陽が光を照らしていた。太陽の光を川の水が反射し、きらきらと輝くその世界はゲームながらとても幻想的だった

「…綺麗……」

「そっか、むささび君は烈火のワールドにスポーンしちゃったから、ユグドラシルの自然を見るのは初めてなんだ、どう？綺麗でしょ、私たちが住んでた地球は昔はこんな感じだったんだって」

むささびは小川に近づくと水に手を入れる、冷たさなどは感じる事は出来ないが、それでも、魚や水草で美しく彩られた川はとても綺麗だった

「…これが、地球……」

「そうだよなー、これが地球の昔の姿ーなんて、ちよっと現実味がないよな、烈火のワールドの方が地球って言われてもしっくりくる感じがするよな」

「それじゃあ、職業習得の前にちよっとこのワールド見てまわろっか！」

「…いいの？」

「もちろん、ゲームはしたい事を出来るから楽しいんだよ、ほら行こ！」

・  
・  
・



それからワールドのいろんな場所を見て回った、広々とした草原も、ドームで囲まれていない村の畑も、木が沢山生えている森も、どれも現実世界では味わえない、本当に綺麗で美しい世界だった、初めて、あの絶望を感じてから初めて、生きる意味を失ってから、初めて自分から何かをしたいとそう、心から思うのだった

「むささび君、最後にいい物見せてあげるこっち来て！」

茶釜さんに近づくと、自分の手を取り、茶釜さんは魔法を唱える、三人の体は淡い光に包まれ、宙に浮く。

茶釜さんはこちらの顔を覗き込みいたずらに、にっこりと笑うと、空へ勢いよく加速した、

風を切る音とあるはずのない浮遊感に包まれ、思わず目をつぶり、茶釜さんの体にしがみつく

しばらく高所と速度に身を固めているとゆっくりと停止するのがわかる

「ほらむささび君、目開けてみて」

茶釜さんに促され、恐る恐る目を開ける……

そこには大自然の情景が映されていた、あまりの光景に言葉を失う

雲の上程の高さから、一つ一つ見て回っていたものが上空から全て一望出来た。

それはとても贅沢な光景だった。

その景色を前にしてはどんな調度品ですらかすむような光景だった

ゆっくりと茶釜さんの手を放し、体を大自然へと向けその激情に身を震わせる

(やっぱり連れてきて正解でしたね)

(うん、気に入ってくれたみたい)

「ゲームも悪くないでしょ？」

「うん、凄い、とても綺麗」

そこにはいつもの言い淀みは無く、ただの機械的な受け答えでもな

く、むささびが、鈴木悟が、しばらくぶりにした本当の会話だった。

・  
・  
・  
上空から大自然を見終わると草原に降り立ち、職業習得を始める。  
周囲にはちらちらとモンスターが見えるがどうやらこちらには気づいていないようだ

「マジックキャスターのクラスを習得するには最初の一步がめんどうさいんだけど、手っ取り早くしちやおつか」

ぶくぶく茶釜がアイテムボックスから黒い本を取り出し、むささびに手渡す

「つて、それ、いいんですか？茶釜さん」

「ん？いいよいいよ、別に使い道もなかったしねー」

「えっと…それは？」

「これは魔力系マジックキャスターのクラスを読むだけで獲得して、+10レベル上がって、更に30レベル到達まで経験値上昇が掛かる魔導書だよ」

この本の価値はわからないが、ぷにっと萌えさんの反応を見るに割と価値のあるものなのだろう

「…ありがとうございます」

「いいよ、いいよ、読んだらステータス割り振りとかの画面が出るから、そこからはぷにっと萌えさんお願いねー」

「はいはい、そっちは私にお任せあれ」

「じゃあ、開いてみて」

「…わかりました…」

ゆっくりと本を開くと効果音が鳴り響き画面にレベルアップつとでかでかと表示される

自動的にコンソールが開き、ステータスの割り振り画面が出てきた

「おお、使つてるところ初めて見たけど、割と地味だね」

「そうですねー、じゃあむささび君ちよつといい？」

そういうとぷにっとなえはコンソールをいじり始める

ピツピツと機械音がしばらく鳴り響いた後、ぷにっとなえが満足そうな声を上げる

「うんー！こんな感じでいいんじゃないかな」

そういつてむささびにステータス割り振り画面を見るが正直わからない

「ありがとうございます」

「よし！これである程度ここでの戦闘は出来るようになったし、あそこのモンスターに向かって魔法撃ってみようか」

そういうと二人は魔法の使い方、リキャストタイムというものやMPについて説明してくれた

どうやら魔法を撃つと次撃つまでに時間がかかるらしい、その時間をリキャストタイムといい、今はあまり意識しなくてもいいが、後々重要になってくるらしい

MPについては特に詳しく教えてくれた、MPは魔法を使うと消費され、使っていないければ回復していくらしい、その為魔法を撃ちすぎるとすぐにMPがなくなってしまうので、魔法を撃つ頻度には注意しろとのことだ

「じゃあさつき教えたとおりに、あそこのスライムにマジックアローを撃ってみようか、あ、ピンク色のは味方だから注意してね」

「今は人間の姿だ！」

そんな二人のやり取りに少しだけ笑ってしまう

「ふふ…あ、あの…すみません。」

二人はぱっとなえを見合わせると

「いいんだよ、笑っても、ほらっ！」

そういうとぷにっとなえはぷにっとなえにフレンドリーファイアを有効にして極大魔法を放つ

「ちよっ!!味方に第十位階魔法とか何考えてるんですか!!!」

ぷにっとなえは思わぬ味方の奇襲に悲鳴を上げる

「ええいつよけるでない！少年の笑いの犠牲になれえ〜！」

「こ、殺されるっ!!!」

「あは！あははははは！」

少年は久しぶりに笑うことができた

．  
．  
．  
．  
むささびは教えられた通りに画面上に表示されているマジックアローと書かれた四角いアイコンをクリックする

「マ、マジックアロー！」

すると自分の両肩辺りに光が収束し、光弾が出現、数メートル先にいる青色のスライムに着弾する、

「わっ、すごい」

自分から放たれた魔法の感動に浸っているとぶくぶく茶釜から指示が飛んでくる

「こつちに気づいたよ近づかれる前に倒しちやおう！」

「うん！」

「マジックアロー！マジックアロー！マジックアロー！」

じわじわと近づいてくるスライムに対してマジックアローを連射する、10レベルのマジックキャスターのMPはあまり消費されない  
5発ほど撃つとスライムは撃破され、その場にクリスタルを落とす  
「おっ、ドロップしてみたんだな、今みたいにモンスターは倒すとたまにクリスタルやアイテムをドロップするから、いい効果やいい物もたまに落とすから拾っておいた方がいいぞ」

「うん！」

むささびはスライムのドロップした青色のクリスタルを拾い上げ見つめる

キラキラと小川の水のように光を反射するクリスタルはこの世界で初めて自分で手に入れたものだ

「初ドロップおめでどう！今日はこんな感じで魔法を使うってことを慣れていこう、そしたらレベリングとかもやっていこう」  
「はい！」

元気な声で返事をする。クリスタルを自分のアイテムボックスにしまい、また近くにいるモンスターにターゲットし、魔法を放つのだった。

一通りの予定も終わり、三人は留置所に戻っていた。

「むささび君お疲れ様、今日は初めて体験する物が多くて疲れたでしょう。」

「で、でも楽しかった、です」

「そうか、それはよかったな」

本当に楽しかった、新しい世界はとても美しく、驚きと感動をくれた

「じゃあ今日はもう落ちる？」

「は、はい、ありがとうございます！」

ぶくぶく茶釜とぷにと萌えは満足そうにうなずくと元の世界へ送り出してくれる

「よかった、じゃあお疲れ様、また明日ね！」

・  
・  
・  
・

「茶釜さん、なんであそこまで親切にしたんですか？あの本…課金アイテムでしょ？」

むささびがログアウトした後、クランの執務を行いながら茶釜に尋ねる

「ん…ちよつと、ね…私はあの子の気持ちわからなくもないからさ」

茶釜は手を止める様子もなく言葉を返すが、言いにくそうに言葉を濁していた。

(似たような境遇、ってことか？…流石に性癖でってわけじゃないだ

ろうし、でもむささび君が身の上を話したことなんてなかったと思うけど…)

「そうですか、まあ、あんまり深くは聞かないでおきます」

「ありがとう」

「それにしても、いい反応でしたね！むささび君あの様子だったら明日もログインしてきてくれそうですね！」

「うん、あの子にも楽しみができたらいいな…」

「昨日、むささび君ログインしてきたみたいですね」

ナインズ・オウン・ゴール、留置所にたち・みー、ぶくぶく茶釜、ぷにゅと萌えが集まっていた。

「ええ私とぷにゅと萌えさんで人間の初心者ワールドにむささび君を連れて行ったんですよ」

「人間の初心者ワールドですか？どうしてですか？」

「ほら、あの子バグかなんかで烈火に生まれてたでしょ？、ユグドラシル最初の楽しみを味わってないなんてもったいないって思って」

「それに見したときは結構いい反応でしたよ」

たち・みーは満足そうな反応を見せる。

「それはよかった」

「最初はやっぱりちよつと暗かったんですけど、やってるうちに段々明るくなつていって、景色を見たときとか結構浸ってましたよ！」

「魔法を初めて撃った時も感動してたみたいだし、これからも来てくれるんじゃないかな？」

むささび君の様子を聞き終わるとたち・みーは真剣な声色で話しかける

「…二人に相談したいんですけど」

「どうしたんですか？たちさん、改まって」

「皆にはまだ行ってないんですが、本格的にあの子をクランに勧誘しようかなと思ってます。」

二人はため息をつくと言葉を返す

「それに関しては私は前に言ったじゃないですか、年齢の件もたっちゃんさんがそう決めたんだったら私はその方針に従いますよ。」

「私も、茶釜さんに同意見ですよ」

「…そう、でしたね、ありがとうございます。」

・

・

「つて事でむささび君、私たちのクランに入らないか?」

むささびはログインして早々の勧誘に困惑していた。

部屋にはメンバー全員が集まっており、むささびを待っていたようだ。

既にたっち・みーはメンバー全員に話を通しており、むささびがクランに入る事に反対意見も出なかった

「…え…いいんですか?」

「もちろん、こちらから勧誘してるからね、どうかな? 私たちと一緒にこの世界を、ユグドラシルと一緒に冒険してみないか?」

「はい! したいです! もっと! もっと! っばいこの世界を見てみたいです!」

「よしっ! クラン、ナインズ・オウン・ゴールに新しいメンバーの誕生だ!」

たっち・みーが高々と宣言するとメンバーは思い思いの言葉を発する

「よっしやああ!」「これからよろしくむささび君!」「記念にスクショ撮ろうぜ!」

誰かが必要としてくれることがこんなにも暖かいことだとは知らなかったむささびは思わず涙を流す、だけど、この涙は今まで流した冷たい涙ではなく、どこか離しがたい、とても暖かい涙だった。

「あ! むささび君また泣いちゃったの??」

「泣き虫直さないとな!」

「これからは俺たちの仲間なんだからな！胸張って行けよ！」

「あ、ありがとうございます!!」

「よし！スクショだ！スクショ！集まって集まって！」

ぐいぐいと暑苦しいほどに中央に寄せられみんなに囲まれる

強引で荒々しいが全く嫌じゃない

「それじゃあイーグルカメラみて！」

ゲーム内には表示されないが最初の思い出のページに泣いている写真なんてもつたいない、顔をぐしぐしと乱暴にこすると、カメラを見る

「「ようこそ！ナインズ・オウン・ゴールへ!!」」

カシヤアツ！と音がなりナインズ・オウン・ゴールに新しいちよつと変わったメンバーが加わるのだった

数か月後…

「やった！1000レベルになった!!」

既にクランにも馴染み、ギルドのみんなの献身的な教育により短い期間での1000レベル到達をむささびは果たしたのだった

「早っ！もう1000いったのか！」

「流石非社会人、毎日すごい時間やってるだけある」

「むささびよく頑張ったな」

喜ぶむささびに皆、各々の声をかける

「それじゃあ、記念に高難易度ダンジョンでも潜りに行きましょう！」  
ウルベルトが提案をするがたち・ミーがそれに異を唱える

「いやいや、1000レベルになったばかりで高難易度ダンジョンはないでしょう、それより、みんなで戦術や、スキルの使い合わせを詰めた方がいいですよ」

「それも悪くはないんですがね、たちさん、習うより慣れろって昔か



ら言うじやないですか、むささび君はそっち系のほうが早くキャラを使いこなせると思いますよ?」

二人の年中行事が始まり、皆呆れた様子で見守る

「あーああ、また始まったよ」

そこへペロロンチーノが止めに入る

「ほら、ある意味100レベルになるってユグドラシルで成人になるってことじやないですか、だからむささび君を連れて男性陣でエロ系のモンスターの討伐にいくつて」黙れ弟」

「これまた決まらないやつでしょ?ほらむささび止めてきて」

「えっ?僕が?」

そうぶにつと萌えの手に背中を押され言い合いをする二人の前に出される

「あつ!あの!けつ、喧嘩やめてください!、たちさんに教えてもらって、その後高難易度ダンジョン一緒に行きましょう!!」

「まつ、まあむささびくんがそういうなら……」

必死の説得に後ろから援護が飛ぶ

「ほらく、二人とも子供に諫められるなんて恥ずかしいぞお」

「うっ」

「大人としての威厳があ」

「たちちさん、子供の見本になる大人になりたいって言ってませんでしたあ?」

「わかった!わかりました!!」

これから二人が喧嘩するたびにむささびは同様に利用されることになるとは知る由もなかった……

クラン、ナインズ・オウン・ゴール、むささびが加入してから既に一年以上が経過していた。

むささびが加入する前から9人は超えていたが、更に人数が増え、克蘭名のナインズは既にふさわしい名前ではなくなっていた。

途中ひと悶着あり、一人が克蘭を辞める様な事件もあったが、克蘭はギルドへの変貌を遂げようとしていた。

「まっつて…なんで僕がギルドマスターなの？」

部屋に呼ばれて早々むささびは戸惑いの声を上げる、  
会議室には皆が集まっており、自分が最後に来た形だ。

ナインズ・オウン・ゴールのメンバー全員が集まり、そこでギルドに移行するにあたり誰がギルド長になるかそういう話になったのだが、本来であれば克蘭から移行するにあたり、克蘭長がギルドマスターになるのが流れではあるが、克蘭長のたち・みーはギルドマスターになるのを辞退したのだ。

理由はナインズ・オウン・ゴール始まって以来の対立があり、それが原因でメンバーが辞めてしまったのだ、その為、辞めてしまったメンバーと仲の良かったウルベルトや一部メンバーと確執ができてしまい、たち・みーがギルドマスターになれば、再結成時に脱退する者が出ると予想されたのだ

そしてたち・みーはむささびをギルドマスターに推薦した

「僕じゃなくてももつと適任な人がいるよ…」

むささびが推薦された理由は複数ある、

第一に克蘭で普段決定事をする際は、タッチ・ミーとウルベルトの二人が主に意見を出し、対立していた、その仲を取り持ち、提案をして両者を収めていたのがむささびであったからだ、

そして克蘭への貢献度も推薦された理由の一つだ

年齢的に働いておらず、趣味もユグドラシル以外になかったが故にほぼ毎日12時間近くログインをしていた、そして、ダンジョン攻略後の執務や調整等も時間を持て余す彼にはいい暇つぶしになったのだ。

そうして圧倒的なログイン率、時間に支えられ、積み重ねられてきた彼の実績は克蘭のPVP勝率を78%まで引き上げるに至っていた。

レベルのほぼ全てを魔力系、その中でも情報系能力に優れるクラスをほとんど習得した彼は、特別な希少クラスを習得していた、ぷにと萌えの誰でも楽々PK術との連携により比類なき、情報戦能力を獲得していた。

ナインズ・オウン・ゴールがクランにしてワールドアイテムを入手できたのも彼の情報よるところが大きい。

もはやむささびはナインズ・オウン・ゴールの屋台骨と言っているほどに成長していたのだ。

そして女性陣からの後押しもあったため、

メンバーからの否定的な意見は全くでなかった。

「みんなで話し合って決めただ、やってももらえないか？」

たち・みーは真剣にこちらの顔を正面から捉え、語りかけてくる普段であれば、たち・みーに噛みつき、異を唱えるウルベルトも何も言わずにこちらを見ていた

みんなに助けを求めるように見渡すが、皆同意見の様だ

「みんなほんとに言ってるの…？」

何かと気にかけてくれていくぶくぶく茶釜がこちらを見て声を上げる

「ギルドマスターって言ってもやる事は今とほとんど変わらないと思うよ、たち・みーさんとウルベルトさんの喧嘩の仲裁に、クランの執務の色々、難しいことがあっても私たちが手伝うからさ」

「ああ、俺たちの長として自信持てよー！」

皆が既に納得し、後押ししてくれている、

求められることが嬉しくて、頼ってくれることが嬉しくて、むささびは目の端に涙を浮かべながら（ゲーム内では表示されないが）感謝を述べる、

「うんっ！っつありがとう！頑張るっ！」

「あれ？もしかしてむささび君泣いてる？」

「泣くなよギルドマスター！俺たちのマスターとして頑張ってくれ！」

「わかりました！ギルドマスターとして頑張ります！」

むささびの返答を受けたつち・ミーが声高に宣言する

「それじゃあクラン長として最後の命令だ！むささび！ギルドマスターとして新しいギルドの命名を命ずる!!」

「うんっ！」

(ギルドマスターとして最初のお仕事、なんて名前にしよう…)

皆が見守る中、むささびはしばらく考えると、顔を上げる。

皆のギルドマスターとして相応しいように、出来るだけキリつとした顔で、声で声高に語る

「クラン、ナインズ・オウン・ゴール改め！ここにギルド！異業種動物園の樹立を宣言します!!」

むささびが宣言し終わると異様な静けさが漂う

「……………」

「ん？今なんて？」

「え？だ、だから、ギルド、異業種どう「やっぱり、ギルド名はみんなで決めようか！」

「そうだな！そつちの方が良さそうだ！」

「よし！皆意見出してくれ！どんなギルド名がいい？」

「えっ？ちよつと！」

「やっぱりナインズ・オウン・ゴールからの移行だし！近い名前がいいよなー！」

「そうだな！」

そうしてギルド名はアインズ・ウール・ゴウンに決まった。

## 新たなる世界

目を開けると自室のベッドで寝ていた。

薄いカーテンがベッドにかけられその先には椅子やダンスなどがとても綺麗な状態で収まっていた。

「…夢？…みんな……」

右手が痺れて動かない、見ると首から下げられた青色のクリスタルを使って作られたペンダントを強く握りしめていた。

とても長い夢を見ていた気がする、なぜか遠くを思うような気持ちがある。

「お目覚めになられましたか？」

不意に声をかけられる、目の前にはアルベドが横になっていた

「…うん……」

「おはようございます、現在は朝の7時13分です」

見ると左手でアルベドの手を強く握っている

「あ……ごめんなさい」

パツとアルベドの手を放し、謝罪の言葉を述べる

「よろしいのです、むささび様！むささび様がお求めになれば私はいつでも！この体を差し出します！」

「…ありがとうございます…でも、アルベドのその気持ちは、タブラさんが作った設定を僕が歪めちゃったからなんだよ？」

「構いません！それは私をむささび様が求めてくださった、そういう事ではないのですか？」

「………」

「私は例え創造主、タブラ・スマラグディナ様にそうあれと作られた根幹を変えられようともかまいません！私は貴方様の為だけに！この身を！心も！全て捧げます！」

「…うん…ありがとうございます……ごめんなさい……」

アルベドはむささびの手を優しく包み込むと優しい声で告げる

「私はむささび様を愛しております、いつでも、どこでも、なんでも、何なりとお申し付けください。」

むささびは深く考え込む

「これからもよろしくお願いします。」

その言葉を聞くとアルベドはベッドの上で平伏し

「承りました、これからも忠義を尽くさせていただきます。」

ささびは少しやりずらくなつた空気を大きめの声で霧散させる

「…あ、朝ごはんでも食べようか」

「はい…」

「そんなのダメです！」

執務室にアルベドの悲痛な声が響き渡る。

食事を終えたむささびは執務室へと入り、エ・ランテルで冒険者になる旨を伝えていた。

「アルベド、声を抑えてください、御方の前ですよ」

「っ！失礼しました、ですが！情報収集というのであれば！僕に行かせればよろしいではないですか！むささび様自らが行かれる必要などありません！どうか命じてください！そうすれば完璧に情報収集してきてまいります！」

「…で、でも、ほらナザリックに僕以上の情報収集できるのは…」

その言葉にアルベドは割って入る。

「むささび様がされなくても！ニグレドがおります！あんな人間の街一つむささび様が出られる必要はありません！」

むささびがどう説得したものかと悩んでいるとデミウルゴスから援護が来る。

「アルベド、それではむささび様をナザリックに監禁しておくつもりかね？」

「っ！そうじゃないわ！でも情報も不確かな人間の国にむささび様自らが赴かれ、何かあったらどうするの！」

「無論十分な護衛をつけるとも、むささび様、護衛はどの様にお考えですか？」

むささびは少し考えると答えを出す

「えーっと…一人は流石にだから…じゃあプレアデスから人間に変装できる人…ナーベラル辺りを…」

「駄目です！私をお連れください！私はナザリックにて貴方様の護衛に私以上の適任はいないと自負しております！」

またもデミウルゴスからの援護が来る。

「アルベド君は人間に変装できるのかい？」

「出来ないわ、でもカルネ村の時のように鎧を着れば！」

「それでもだよ、この世界には私たちの知らない能力がいくつもある、それは君も知っているはずだ、そんな中、鎧で隠すだけなど簡単に見破られるだろう、最低でも人間種に変身、変装できるものが望ましいだろう。」

「づっ！」

アルベドはデミウルゴスの反論に変な声を上げる

「むささび様、お考え直しいただけませんか？むささび様が万が一襲われた場合でも、安全に転移していただくだけの時間を稼ぎ、尚且つ人間種に変身できるもので…プレアデスよりナーベラル、ソリュシャン、ユリ辺りが適任化と」

その提案にアルベドが口をはさむ

「足りないわ！むささび様！お願いします！私を連れていけないというのであれば！せめて！せめて軍をお連れください！」

「アルベド！むささび様は戦争をしに行くわけではないのだよ？それに…」

デミウルゴスはアルベドに耳打ちする、むささびの距離からは聞き取れない

（いいかい？良妻は夫に常に付き従うものではなく、家で帰りを待つのだよ？）

(それでも！)

(いい加減冷静になつてほしいものだね、それにプレアデスたちが三人もいれば、逃げるだけの時間稼ぎには十分だ、もし襲われた際はすぐに迎撃部隊を出し、同時に救出部隊も出す、ここまでしても不安まだかな?)

「つつつ！わかつたわ、むささび様行つてらっしゃいませ、私は貴方様の帰りをナザリックにて待たせていただきます！（妻として！）」ですがお約束ください、私の元に、ナザリックに必ず戻られると、」

(よくわからないけど納得してくれた?...やっぱリアルベドにはナザリックの中心にいてほしいしよかつた...よね?)

「わかりました、ギルドにかけて誓います、ナザリックに、みんなの元に必ず戻ってきます！」

「ならばもうお引止めはしません、行つてらっしゃいませ！無事を祈っております！」

むささび達はエ・ランテルの街を騒がせていた。

「おい、あれが噂に聞くアダマンタイト級冒険者チーム、蒼の薔薇か？」

「美しい」

「だけど、プレートは銅みたいだぞ？」

ざわざわとする人々の視線の先には四人の冒険者が歩いていた。

先頭には小柄な真つ青なフード付きのローブを羽織り、泣き顔を彷彿させる奇妙なマスクをつけたマジックキャスターが歩き、その後ろにはおよそ戦闘には不向きと思われる、眼鏡をかけ、首にはスカーフが巻かれ、両腕にガントレットを嵌めた胸の大きな絶世の美女、ユーリ。

その横を腰に剣を下げ、ポニーテールの似合う女性、ナーベ。

さらにその後ろには後ろ腰に短剣を下げたレンジャーを思わせる



軽装の金髪の女性、ソーイが歩いていった。

二人もユーリに負けず劣らずの美少女だったがその雰囲気はまるで違った、

ナーベは鋭い目つきで周囲に警戒の目を張り巡らせ、強気の女性を思わせる。

ソーイは余裕の笑みを浮かべ貴族令嬢のような歩き方で歩いていた。

「たまに話題を作るために有名な冒険者の格好を真似する輩が現れるが、そのたぐいだらう」

「そんなことよりお前、どの子が好みだ？ちなみに俺は眼鏡かけてる方」

「んー、今年一番悩む質問だな、やっぱり俺は金髪のー」

そんな下劣な会話をする男たちにナーベは警戒を絶やさず、殺意の目を向けていた。

「ミノムシ共が…むささび様殺すご許可をいただけますか？」

（駄目ーっ！言つたでしょ！簡単に殺すとか言わないで！それに僕はささびー様じゃなくてさん！）

ミスを犯したナーベに耳打ちしながら注意していると男たちが近づいてきた

「やお嬢さん方、俺たちアイアンの冒険者なんだけど、良かったら先輩として色々教えてあげるよ」

そんな命知らずにもナンパを仕掛けてきた者たちをユーリが庇う

「申し訳ないですが、私たちこれから依頼を受けにいけますので」

ユーリがナンパの相手をしている後ろでソーイがナーベが剣を引き抜こうとしているのを必死に止めていた

（もうおー、これじゃあ先が…）

「み、みんな、行くよー！」

そう声かけすると三人はさっと切り上げ後をついてくる

「冒険者組合の人が教えてくれた宿はここら辺のはずなんだけど…」

「あれではないですか？」

ユーリが指さす先には教えられた通りの看板がかかっていた

「あ、たぶんあれであってると思う」

宿屋の扉の前に近づくと、冒険者組合で言われた通りの外観だった、小汚く、一階はバーになっているようだ

扉を開けては入っていくと、そこには店同様に小汚い連中が集まって酒を飲んでいた

視線が自分たちに向けられ、下卑た笑みを浮かべ、こちらを値踏みしているが、反応せずにカウンターで皿を拭いている店主らしき男の元へと向かう。

カウンターはささびの身長には大きく背伸びをしてやつとカウンターの上が見られるかといった高さだ、その様子を見た後ろの冒険者から笑い声が聞こえる

「おいおい！お使いに来るような場所じゃねえぞ」「さつさとママの所に帰りな！」

「ゴミムシ共がッ！」

ナーベが腰の剣に手をかけるのを脇腹に指を差し込み静止する。

「ひゃんっ！」

驚きの表情でこちらを見るナーベに小さい声で注意する

(ダメって言ったでしょ！)

(も、申し訳ありません、ささびさーん)

「おいおい今の声聞いたか？ひゃんだってよ、ベッドの上でもさぞかしいい声で鳴いてくれるにちげえねえー」

「そりゃあいいや、おい！姉ちゃん！そんなさえない奴の所にいないでこつち来て一緒に酒飲もうや！」

(ツツツ!!ミジンコ風情がツ!!絶対ニコロスツ!!)

殺人欲求を抑えているナーベを見てると店主から声がかかる

「おい！なんの用だ、冷やかしなら帰んな！」

「あ、すみません、四人部屋をお願いします。」

「四人部屋？チッ！一日銀貨一枚、朝食は付けてやるよ」

いわれた通りの金額をカウンターに乗せると、店主はそれを乱暴に受け取り、カギを渡してくる

「部屋は三階の一番奥だ。」

「ありがとうございます。」

店主にお礼をいい立ち去ろうとすると引き留められる

「おい！坊主！お前仮にもリーダーなんだろ？リーダーがぼんぼん感謝の言葉なんて言ってるじゃねえー、リーダーの評価はチームの評価だぞ、実家気分でいると、いつ全滅してもおかしくねえーからな」

店主はそういうと再び皿を拭き始めた

何も言わずに階段の方へ歩き出すーそこに汚い足が道を塞いできた

「へへへへ」

小汚いスキンヘッドの男は下品な笑みでこちらの反応を伺っている

足を避けて通ろうとするが仲間が立ち上がり、道を更に塞いでくる。

「おいおい、つれねえーな、ぼくちゃんは先に上で休んでいいぞお、こつちの姉ちゃんたちをおいてってくれば文句は言わねえーからよ」

本当にこんなしゃべり方する奴いるんだ、などと思いながら仮面越しに睨む

「ほら、さっさと行きな」

チンピラが肩を叩いてくる、店主の顔を確認すると、こちらを見ていたが直ぐに顔を伏せる、それを見るとささびは男を掴んで投げ飛ばした。

「邪魔ッ！」

チンピラは綺麗な放物線を描きながら飛んでいきテーブルに大きな音を立てて激突する。

「なっ！こいつ！」ただのガキじゃねえ！

そんなチンピラたちの驚きの声を一つの悲鳴がかき消す

「おっきやああああー！」

ざわついていた酒場がその悲鳴で一瞬で静まり返り、

悲鳴を上げた赤髪の女性がずんずんと足音を立て怒鳴りながら近づいてくる。

「ちよつとーちよつとー！あんた何してくれてんのよ！あんたのせいで私のポーション、ンが…」

女性の声は投げ飛ばしてきた相手を見て勢いを失う。

「あんたが投げたの？」

「は、はい、驚かせてすみません」

赤髪の女性は頭を振って混乱を取り除くと弁償を要求してくる

「それで？あなたのせいで私の治癒のポーションが割れちゃったんだけどー！どうしてくれるのよ！」

「そ、それは、あちらの人たちが始めたのであちらの方々に請求した方が、い、いいと思います。」

それを聞いたチンピラたちは青ざめた顔で苦笑いしている。

「金貨一枚に銀貨十枚よ？昼間つから酒飲んでるようなポンコツ冒険者に払えるわけないでしょ？」

赤髪の女性はささびを下から観察し始める。

「あんた見た目はぼろいけど、その青色のローブマジックアイテムじゃない、そんないい装備してるくらいだし、治癒のポーションぐらい持つてるんでは？弁償以上はなぞまないし、現物でもいいからさ」

（んーどうしよう、お金はそんなに持ってないし、あの人の割れちゃったポーション青色だし…：しょうがない壊しちゃったのは僕だからね）  
「う、うん、ならこれで」

ささびは懐から赤いユグドラシルのポーションを取り出すと赤髪の女性に手渡す。

「そ、それでいいですか？」

「赤い…まあとりあえずは」

「はーっ！疲れたあ〜」

ささびは部屋につくと、部屋に魔法をかけベッドに大の字にダイブ

する。ナザリックのベッドとは比べ物にならないほど質が悪く、少しかび臭い。

部屋は四人で使うには少し狭くベッドも2つしか置かれていない、その他には貴重品を入れておくボックスと簡易的な椅子とテーブルがあるだけだった。

「お疲れ様です、むささび様」

ユーリからのねぎらいの言葉に顔をしかめる

「一応魔法は掛けたけど、盗聴されてる可能性もあるし、練習もかねてナザリックの外にいるときは、敬語なし！敬称は様じゃなくてさん！」

「かしこまりました」

「わかりました」

どうやら効果があるのはソリユシャンだけらしい

「でもお金持っててよかった、全然ないけど、なかったら恥かしいちゃう所だったよ」

ささびの安堵の声にナーベが疑問を訪ねる

「金貨であれば、ナザリックには大量にあると思われるのですが…」

その疑問にユーリが答える

「ユグドラシルの金貨を使ったらユグドラシルの者がいるってわかってしまうでしょ？だからあえて現地のお金を使うことでばれないようにしているのよ」

「…なるほど」

ささびは大きく伸びをすると疲れた声でいう

「もう今日は休もうかな」

「それでしたらナザリックにご帰還されますか？」

ナザリックに帰ったらもう一回出るときにアルベドが何か言ってきたきそうだが、猛反対してきたアルベドに困っていたのを、デミウルゴスが一言で納めてくれたのだ、アルベドを抑える方法を今度デミウルゴスに教えてもらおう。

「んーせっかくお金払って宿取ったんだし、ここで休むよ」

そこへナーベが大きい声で意を唱える

「この様な薄汚い場所に至高の御方が、とま、るなど…申し訳ありません」

その声はささびの無言の視線で勢いを失う

そこへソリユシヤンが前にでる

「それでしたら私は部屋の前で警戒を」

「だめ！普通の冒険者はそんなことしないよ！皆！今日はこの宿で休むのー」

（（ということは！誰かがむささび様のお隣で…））

「ベッドの…内訳はどう、いたしますか？」

「みんなの好きにしていよいよ、僕は…もう、ねる…から」

眠りに落ちる主人を見てプレアデスは顔を合わせと、無言のまま三人はこぶしを突き出す

（（じゃんけんッ！））

ナーベラルは主人との添い寝を果たした。

朝早く、ささび達は冒険者組合の依頼掲示板を見ていた。

周りの冒険者がこちらを伺ってはひそひそと蒼の薔薇だの偽物だのと話をしているのが目につくが気にしないようにする。

ちらりと三人を見るが昨日言い聞かせておいただけ甲斐あって、殺気が多少漏れているが、抑えているようだ。

（んー看板に書かれてた文字でわかってたけど…やっぱり読めないなあー）

「みんな…読める？」

「いえ、私はこの文字を知りません」

ユーリは読めないらしい二人にも顔を向けるが、首を横に振るだけだった。

「受付の人に聞いた方が良さそうかな」

受付カウンターまで歩き、背伸びしてギリギリ頭の見える受付嬢に声をかける

「あー」

「はい、何か御用でしょうか」

後ろではささびのその姿を見てクスクスと声が聞こえる、むっと形のいい眉を顰めると魔法を唱える、ささびの体が薄い魔法の膜に覆われ、ふわっと体が宙に浮き、カウンターに適切な高さで停止する。

それを見たほかの冒険者はぎょっとした顔を見せるとすぐに目を伏せた

「ふふんっ♪」

「あ、あー」

受付嬢から戸惑いの声を聴きはつと気が付き会話を再開させる。

「ごめんなさい、掲示板の文字が読めないんですが、どういった依頼があるか教えてもらえませんか？」

「ええ？」

受付嬢は驚きの声を上げるとしばらく固まっている

「あ、ごめんなさい、僕たちは異国の人間でこの国の文字が読めなくて」

「な、なるほど、そういう事でしたか、それでしたらご案内させていただきますね。」

そういうと受付嬢はカウンターからいくつか書類を取り出す。

「依頼を受けるのは初めてですか？」

「はい」

「それでしたらこちらの薬草採取が最も一般的に初心者の方がこなされる依頼です」

「んー、僕は第四位階魔法が使えます、ナーベは第三位階、ユーリもソーイもそれに見合う実力を持ったレンジャーとモンクです、もっと難易度の高いものをさせてもらえませんか？」

その発言に周囲がざわつくが目の前の少年が宙に浮いている魔法はフライ、第三位階、それを小柄な少年が背が足りないという理由から使っているのを見れば、何らおかしい話ではなかった。

「申し訳ございませんが規則ですので、カッパプレートの方は例外なく、カッパプレート以外の依頼は受けることはできません。」

「そうですか…それならカッパの依頼で最も難易度の高い仕事をお願いします。」

「わかりました、ただいまご用意いたしますね。」

(やった！誘導成功!!)

思わずガッツポーズを取りそうになるのをギリギリ抑える。

いい終えると受付嬢はカウンターの後ろへと下がっていくそこへ後ろ声がかかる。

「それでしたら、私たちの仕事を手伝いませんか？」

見るとそこには銀級冒険者チームが立っていた。

「それじゃあ、お話を聞かせてください」

ささびがそういうとリーダーらしき声をかけてきた男が声を上げる

「ではまず自己紹介から、私が漆黒の剣のリーダー、ペテル・モークです、戦士をやっています。あちらがチームの目と耳である、レンジャーのルクルット・ボルブ」

ルクルットと紹介された男はナーベに手を振るが、相手にもされていないようだった

「こちらが治癒魔法や自然を操る魔法を使う、ドルイドのダイン・ウツドワンダー」

ダインは優しそうな笑顔でにっこりと笑うと軽く挨拶をしてくる

「よろしく願います」

「そして最後にマジックキャスターであり、チームの頭脳、ニニヤ・ザ・スペルキャスター」

ニニヤは少し気恥しそうに挨拶をする

「よろしく、しかしペテル、その恥ずかしい二つ名やめませんか？」

「いいじゃないですか」

「実はこいつタレント持ちなんだ」

(タレント…この世界の生まれついでの特異能力…だったっけ?)



「魔法適正とかいうタレントで確か習熟に8年かかる魔法が4年で済むんだっけ？」

「すごい、半分しかかからないんですね！」

「この能力を持って生まれたのは幸運でした、夢に踏み出す第一歩が踏み出せたのですから」

「なにはともあれ有名なタレント持ちという事です」

「まあこの街には私よりも有名な方がいらつしやいますけどね」

「バレアレ氏であるな」

「バレアレさん？」

「なるほど彼のことをご存じなかったんですね、彼はあらゆるマジックアイテムを使用可能というタレントを持っていました……」

それを聞くとナーベが漆黒の剣に聞こえないように耳打ちしてくる

(その人間、危険かと)

(うん、わかってるよ、大丈夫)

「この街で名の知れた薬師の孫にあたる人物で高品質なポーションなどを手に入れた際は彼の所に行くのがもっと信頼できますね」

頷いて返すと、本題に入っていく

「それで今回手伝っていただきたい仕事の話なのですが、実は依頼というわけではないんです。」

「どういうことですか？」

「モンスターを倒すと、街から組合を通して報奨金が出るんですが、それを目当てにトブの大森林あたり草原でモンスターを狩ろう、と考えています。」

「モンスター討伐……ですか？」

「はい、という前にチームと相談させてもらってもいいですか？」

「もちろんです」

了承を得ると三人の方へ向くが……

「私はささびさーん、が決めたことに従います」

「私も異論ございません。」

「私もですわ」

「……………」

漆黒の剣に向き直る

「大丈夫みたいです」

漆黒の剣は苦笑いしていた。

話も一通り終わり冒険者組合の階段を下りていた。

「それじゃあ準備したい事などありますか？」

「いえ、特にありません」

「それでしたらすぐにでも出発しましょう」

そこへ受付嬢から声がかかる。

「あ、ささびさん、ご指名の依頼が入っておりますが…」

その言葉に一行は足を止める。

「…は、はい、どなたでしょうか……」

「ンフィーレア・バレアレさんです。」

受付嬢から聞かされた言葉にプレアデスたちを除いた面々が驚きの声を上げる

「「ええ？」」

面々が驚いていると階段の影から新たな人物が顔を出す。

「どうも、僕が依頼させていただきました、ンフィーレア・バレアレです」

ナーベが腰の剣に手をかけ、ささびの前に出ようとするのをすかさず脇腹に指をさし止める

「ひゃんっ！」

（もう！勝手な行動しないで！警戒しすぎると僕たちが警戒されちゃうよー！）

ナーベは頭を下げて脇に戻る

「ごめんなさい、僕たちは既にほかの依頼を受けたので、お断りさせてもらいます。」

その言葉にペテルが反応する

「え？せつかくの指名の依頼ですよっ！」

「え、でも先に漆黒の剣さんたちから依頼受けてるし、それに高額な依頼が飛び込んできたからってそっちに行くのはちよつと…」

「でも！せつかくの指名ですし」

（なんで自分たちが断られるのにこんな言ってくるんだろう…僕たちが嫌になったとか？やっぱりプレアデスたちかなあ…）

「じゃ、じゃあ、バレアレさんの依頼を聞いてから決めるといふ事で…」

「僕はンファイレア・バレアレ、この街で薬師をしています。今回、薬草採取の為にカルネ村近くの森まで行くつもりです。それで、そこまでの護衛と薬草採取の手伝いを依頼したいのですが…」

ささびは少し俯き、話始める

「それは構いません。ですがどうして僕たちなんでしょうか、僕たちは昨日この街に来て、知り合いと呼べる人たちはたった今できた、漆黒の剣の人たちぐらいです。そんな中どうして僕たちへの指名なんですか？」

「それは…宿屋の一件を聞いたからです。」

「宿屋の一件ですか？」

「はい、お店に来た人たちが話していたのですが、イビルアイさんにそっくりな格好をした子供のマジックキャスターがアイアンのプレートを付けた大人を投げ飛ばしたって、ちょうど今まで依頼をしていた人たちが他の街に行かれたので、新しい人を探す目的と、カッパーの人たちならお安いかなって思いました…」

（…もう正体がバレちゃったのかな？それにイビルアイって誰なんだろう…それに漆黒の剣の人たちの依頼もあるし…ここは…）

「漆黒の剣の皆さんよかったら一緒に依頼を受けませんか？」

「はい、それは構いませんが…」

ペテルはちらつとンファイレアの方を見る、やはりカッパーとは言え2パーティーを雇うとなれば話は変わってくるはずだ

「行きはンファイレアさんの護衛に専念してカルネ村まで行き、薬草採取をして、帰りは積極的にモンスターを狩り、組合からの報奨金をもらう、どうでしょう？それに薬草採取ではダインさんのドルイドの力は役立つと思います」

ンファイレアは特に考える素振りも見せずokを出す

「わかりました、それで構いません」

（やっぱり…銀級、銅級冒険者チームを雇うんだったら、もうちよつと上の冒険者チームをやつとつた方がいいだろうし、それに帰りにモンスターを狩るつてことは危険度も上がるし、下手をしたら積み荷を、せっかく採取した薬草を捨てて…なんてことになつちやつたら大変だもん、やっぱり他に目的があるんじゃないやあ…）

「どうされました？」

ンファイレアに声を掛けられ、深くかんがえこんでいたことに気づく

「い、いえ、何でもありません、じゃあ、準備とかどうしますか？僕たちと漆黒の剣の皆さんは準備は終わってますけど…」

「それならすぐに出発しましょう！」

ささび達はエランテルを出て、既にそれなりの距離を進んでいた。「ささびさん、この先の小川があります、そこで馬を休ませたいのがよろしいですか？」

「はい、大丈夫です」

小川に到着すると馬を休ませ、漆黒の剣やみんなもある程度警戒しながら腰を下ろし休憩している。

ささびはユーリに近づくと耳打ちする

（さつき魔法でちよつと調べただけど、やっぱりあのンファイレアって人、僕たちに何か目的があるらしいんだ）

（それは…私たちの正体がバレた、もしくは怪しんでいるという事でしょうか？）

（わからないけど、普通の依頼じゃないって事だけはわかったから注

意してね…もうカルネ村までのルートは調べたけど、待ち伏せとかそういう人はいなかったから大丈夫だとは思うけど…)

(かしこまりました、注意しておきます。)

そんなやり取りをしているとルクルットが近づいてくる

「ナーベさんは恋人とかがっているんですか？」

「いません」

ナーベは冷たく言い放つがルクルットには全く効果が…というより逆効果だったらしい

「惚れました付き合ってください！」

「黙れナメクジ、引つ込まないと喉をつぶしますよ？」

ナーベの人へと向ける態度に冷や汗をかきながら注意する

「な、ナーベさん！そんなこと言ったらだめです！」

そこへペテルが援軍に来る

「こらっ！ふざけてないで警戒しろ！」

「いてっ！殴ることないだろ！どうせここにはゴブリンやオーガぐらいしか出ないんだからよ」

そこへニヤも話に入ってくる

「そんなことはありませんよ、昔の文献にはフロストドラゴンがアゼリリシア山脈から飛んでくるって話もあるんですから」

ささびは話題を変えるためにその話に乗っかる。

「フロストドラゴン…他にこの辺りに出る強いモンスターの情報はありますか？」

その疑問にはインファイアが答える。

「トブの大森林のちょうどカルネ村側は森の賢王という魔獣の縄張りになっていきます、なんでも数百年生きている強大な魔獣で、蛇の尻尾を持つ大型の四足獣と伝えられています。」

「え？確か薬草採取には森に入るんじゃない？」

「はい、ですが僕のおばあちゃんが若いころからずっと通っているスポットでして、魔獣がたまに出るぐらいで、森の賢王には遭遇したことはないそうです。」

「そうなんですな」

ささび達は既に休憩を終え、カルネ村へと向かっていた

「これからトブの大森林沿いの道に出ます、ちよつとした危険地帯なので警戒をお願いします」

依頼主からの要請にささび達一行も警戒を一段階引き上げる、無論ソーイヤささびの魔法の探知から逃れられる物がいないことは既に確認済だが、対面上そうした方がいいだろう。

「ナーベちゃんっていつも余裕の態度だよなあやっぱり俺の目と耳を信じてるから？」

そんな余裕の態度を感知したルクルットが軽口を叩きながら近づいてくる

「違います、ささびさーんがいるからです」

ルクルットは悲しそうな顔を見ると爆弾を投下してくる。

「もしかして、ささびさんとナーベちゃんって恋仲だったりするの？」

「なっ！何を言うのですか！ささび様にはアルベド様という方が！」

ナーベに爆弾がクリティカルヒットし、更に爆弾が追加される。

「あ、なっ、ナーベ、言っちゃダメ!!」

「あ、ああ」

ナーベは失言を自覚し、自分の口を押えている

「あちやく」

ルクルットは苦笑いしながら答える

「そ、そっかささびさんには決まった相手がいるんだ」

そんなルクルットをペテルが後ろから殴りつける

「こらー仲間がすみません、詮索はご法度だというのに……」

ささびは深くため息をつくと言葉を返す

「い、いえ、こちらこそ、気をつけてくれれば問題ないです……」

やりにくくなつた空気をやりにくくした張本人が変えに掛かる

「ささびさん、さつき周囲警戒してるって言ってたけど、ささびさんってマジックキヤスターだろ？」

「あ、いえ、感知系の魔法を使っているの」

「なあーニニヤ、第四階魔法の習得ってどれくらいすごいった？」

ルクルットは後ろを歩く中性的な顔立ちの少女に疑問をかける

「凄いなんて話じゃないですよ、常人の限界が第三位階までとされていますからね、それを超える第四階は、才能を持った人が更に努力を重ねてやっと習得できる領域です、ちなみに第四階まで使える人は平均で50歳ぐらいですよ」

「さ、ささびさんって何歳なの？」

「ぼ、僕は13歳です」

ニニヤがその言葉に驚きの声を上げる

「ほんとですか?! 13歳で第四階まで習得なんて…」

（やっぱりナーベと同じ第三位階までにしといたほうがよかつたかな…）

「ささびさんはどこで魔法を学ばれたんですか？」

「ぼ、僕はー、その、仲間たちと、独学で…」

その言葉は更にニニヤを驚かせる

「独学で、その速さでそこまで?!」

その言葉にダインも同意する

「まさに英雄であるな」

ささびはその言葉を返す前に、自分の探知系魔法に反応があったのに気が付く

「…来ました、森のあちら側、オーガ6体、ゴブリン32体」

少し先に見えるまだ何も見えない森を指さす

「正確な数までわかるんですか？」

「あ、は、はい」

「ゴブリンの群れにしては大所帯だな、どうする？」

「僕たちは問題ないですよ」

その言葉を最後に全員が戦闘態勢に入る。

「ンフィーレアさんは後ろへ！ 采配はどうしますか？」

「僕たちが前衛をやります、漆黒の剣の皆さんは横から挟撃してください。」

「わかりました、よしみんな！戦闘準備！」

「でもこのまま戦闘をすると森に逃げられる可能性があるけど…」

「なら、いつも通りの手で行こうぜ？」

「そうだな、ささびさん、相手を出来るだけ引き付けてください、残らず殲滅しましょう！」

「わかりました。敵の突撃はユーリとソリュシャンがブロックします、抜けてきたゴブリンたちは僕とナーベが撃ちますから、漆黒の剣の皆さんは、前衛の衝突と同時に側面に回って攻撃してください。」

「了解です、ダイーン、私と一緒に突撃、敵を混乱させる、ルクルツトは一步後ろでニニヤの護衛と乱戦の指示、ニニヤは防御魔法を張り終わったら攻撃魔法で各所の援護に」

「了解」

「奴ら見えてきたぜー！」

「それじゃあみんな説明した通りをお願いします」

「わかりました」

(んー敬語もちよつとは柔らかくなつたし…いいの、かな?)

そんなことを考えていると、ゴブリンたちはどんどんと近づいてくる。

そしてユーリとソーイが先頭を走ってくるオーガたちを薙ぎ払う。

ユーリはオーガが振り下ろした棍棒を軽くよけ、懐に入り込むとオーガの腹に一発だけ独特な構えから発勁を繰り出す。

美しい細い腕がオーガの腹に当たるとオーガの腹は殴られた方とは反対側から内臓をぶちまける。

「グオオオオオオ!!」

後ろから更に突撃しようとしていたオーガたちに内臓をぶちまけ残りのオーガは驚き、足を止める。

その隙をソーイは見逃さない、アサシンのクラスを取得している彼女はユーリとは対照的にユーリに気を取られているオーガの首を静かに切り裂いていく。

最初の一体のオーガが倒れるまでに更に2体のオーガの首を掻き切り、最初の激突で既に4体のオーガが倒れていた。



「す、すげえー!!」

「あれじゃあ、オリハルコンいや、アダマンタイト級じゃないか」

「私たちもいくぞー!」

漆黒の剣は激突を確認すると、ユーリ達に気を取られているゴブリ  
ンたちの側面に回る。

「はあっ!」「ふんっ!」

ペテルとダインが横から突撃し、ゴ布林たちを倒していく、横や  
背後に回ろうとすれば、ルクルツトやニヤから攻撃が飛び乱戦に持  
ち込ませない形だ。

ささびとナーベはそれを上空から確認すると、攻撃魔法を放つ。

「ファイヤーボール!」「ライトニング!」

更に二体のオーガが倒れ、一番の脅威が全滅する。

自分たちだけになったゴ布林は不利を察して逃走を試みる

「くっそ!待て!」

残りのゴ布林も森から離され開けた場所で逃げ場なく殲滅され  
るだけであった。

戦闘が終わり、辺りも暗くなり始め、一行は野営を始め、食事を取っ  
ていた

焚火にを囲み、暖かいお肉入りのスープはあまりいい味ではなかつ  
たが、疲れた体にはちょうど良かった。

「いやー凄かったな!」

漆黒の剣のメンバーは各々関心の声を上げる。

「ええ、ユーリさんたちの能力もすごかったですが、ささびさんとナー  
ベさんの上空からの支援はとてもありがたかったですね」

「うむ、オーガの腹を貫いた拳、お見事である!」

「まさに英雄の戦いって感じだったな、ナーベちゃんも下から見  
ただけど、かっこよかったぜ!」

「.....」

「い、いえ僕たちもまだまだですよ…」

漆黒の剣は顔を見合わせると、苦笑いをする。

「みなさんも、いい連携でした、お互いの能力をちゃんと把握していないとできない、いい動きでした。」

「まっ、俺たちには共通の目的があるからな！」

ルクルットがそういうと、漆黒の剣の全員が懐から黒い短剣を取り出し話始める。

「俺たちはのチーム名、漆黒の剣って名前も十三英雄の黒騎士から取ったものなんだ、これを見つけてるのが俺たちの目標なんだ」

「本物が手に入るまでの間、これが私たちの印なんです」

「やっぱり、みんなで一つの目標があると違いますよね」

「ささびさんは羨ましいよおー、そんな美女に囲まれて冒険できるんだからなあーうちのチームは男だけだから」

「ささびさんの冒険の話も聞きたいです！」

ニニヤがそういうとほかの面々も聞いてくる

「そうですね、そこまで強くなれた理由も聞いてみたですね！」

「じ、実はこのパーティーは結成して間もなく、前はもっと大きな場所に所属してたんです」

漆黒の剣に促され、ささびは輝ける記憶の始まりを話し始める。

「僕がとっても弱かったころ、僕を助けてくれたのは純銀の聖騎士でした。」

一人ぼっちだった僕を助けてくれて、暖かく迎え入れてくれたんです、そして数年間一緒に冒険をして、みんなと過ごした時は、思い出は、絶対に忘れられない、本当に大切な宝物なんです。」

これまで話に興味がなさそうにしていたプレアデスたちも真剣な面持ちでささびの話聞いていた。

「いつの日か、その人たちに匹敵する仲間ができますよ！」

「そんな日は絶対にこない！」

ささびはとっさに出してしまった言葉にはっとするとすぐに謝罪する。

「ごめんなさい、少し風にあっただって来ます…」

ささびがその場を立ち去るとプレアデスたちもついてくる。

少し重い空気が流れ、ぱちぱちと薪の音だけが夜の草原に響いていた。

「悪い事を言っちゃったみたいですね」

「うむ、何かあったみたいだろうな」

「ささびさん普段は大人しそうだったのに、あんなに…」

「全滅つてところじゃないかな…仲間を戦闘で全員失った人はあんな感じの雰囲気を見せるよ」

「全滅…か、あの年で、きついだろうな…」

普段は軽口ばかりを叩いているルクルツトすらも、妙な面持ちで俯いていた

「発した言葉は元には戻らないのである、故に、それを塗り替えるだけの何かをかの御仁に抱かせるしかないのである。」

「…そうします」

（奪われる辛さは知っていたはずなのに、どうして考えが至らなかったんだろう…）

ささびは夜風の冷たさを肌で感じながら、夜空を見上げていた。

「ささび様大丈夫ですか？」

ユーリが後ろから近づき声をかけてくる

「あの人間に不快感を？」

ナーベは殺意を持って質問してくる。

「私であれば命じてくだされば、病気に見せかけて殺すことも」

ソーイも怒りを覚えているようだ。

「みんな…敬語…」

「…はい」

何故か胸が苦しい、締め付けられているような、体が内側から冷や

されているような気持になる

「んっ…ぐすっ……」

「ささび様、やはり今日はもうお休みになられた方が…」

「…っ…ふ…う、うん……」

漆黒の剣の人たちや依頼主に聞こえぬよう必死に押し殺すが、それでも涙が溢れてくる。

「…ささび様…」

ユーリが近くに来て背中をさすってくれる。

思わずユーリに抱き着きその涙を必死にこらえるのだった。

ささびとユーリをテントに見送ったソーイは皆が食事を取っていた場所まで戻っていた。

「あ、ソーイさん」

「ささびさんは先にテントでお休みになされました、夜の警戒は私とナーベで交代で行いますから、皆さんはもう休んでください、それでは」

早々と立ち去ろうとするソーイをニニヤが引き留める。

「ソーイさん、さつきほどはもうしわありませんでした!」

ニニヤは頭を下げて謝るがソーイは素っ気なく返す

「それであれば直接ささびさんに謝るのがよろしいかと、それでは」

ソーイは冷たく言い放つと足早にその場を後にした。

ささびが寝静まったころ、エ・ランテルの墓地では不穏な影が動いているのだった…

## 冒険の一ページ

「……ここは……」

天井はなんだか知っている気がするが、ここがどこだったか思い出せない。

暗く、どんよりと時間が停滞したような部屋だ。

壁には時計がかけられており深夜の1時を指していた。

ベッドから降り、部屋の外へと足を運ぶ。

廊下に出ると、部屋同様に白を基調にした、豪華な家であることがわかる。

ゴニヨゴニヨと聞き取る事が難しいが、話声が聞こえる。

そちらの方に歩いていくと、何故か身を隠しながら、その声を伺っている自分がいた。

「……だか……いった……だ……」

まだよく聞こえない、扉に耳を当て、その声を拾おうと試みる

「……顔がよかったから拾ってきたんだ、ある程度、対外的に良い感じになってもらわないと困るだろう。」

「お医者様の話ではあなたに問題があるって言ってたじゃない！」

どうやら喧嘩をしているらしい。

「またその話か？仕方ないだろう！」

「それをあんな小汚いガキを拾ってきて！」

「じゃあどうする?!今から捨てに行くか?そうすれば子供を拾ってきたが、育てられずに捨てた大馬鹿だ!そうなたら対外もくそもあるか!」

「私はそういう事が言いたいんじゃないの!」

その言葉で自分が何者なのか、はつきりと思い出してくる……

この豪華な家も、自分が何故こんな空虚な気持ちでいるのかも……

そんな時、残酷にも扉が開く。

ぷしゅーつと音を立て左に自動で扉が開くと、部屋の中の二人は驚きの表情でこちらを見つめる。

「さ、悟、どうしたんだい、こ、こんな時間にまだ夜中じゃないか」  
女の人は嫌そうな顔でこちらを見もしない。

「さあ、今日は少し寒い、ベッドから離れていると風邪をひくぞ？」  
おじさんに促され、自分の部屋へと連れ戻される。

「もう寝なさい、私はまだ仕事が残っているから」

また遠くから声が聞こえる。

「…様…：さ…び様…：…」

どうやら自分を読んでいるらしい。

「むささび様！」

アルベドが横で必死に自分の名前を呼んでいた。

「むささび様！お気づきになられましたか?!寝ながら涙を流され、とても苦しんでいた様子でしたので、申し訳ございません。無礼と知りながらも起こさせていただきました！」

今だ状況がよくつかめないが、うなされている自分を心配してくれたのだろう。

「…うん、ありがとう…いいの…いい夢じゃなかったから…」

アルベドはやるせない顔でこちらを見ている。

「むささび様、どうかお一人で抱え込まず、私たちに、私にご相談ください。何か問題があるのでしたら、私が必ず解決して見せます！」

「うーうん、大丈夫、もう終わったことだから…」

そういうとむささびはどこか遠くを見る目になり、ベッドから起き上がる。

「…今は何時？」

「…はい…現在は朝の4時でございます。」

「そっか、じゃあそろそろ依頼に戻るよ。いつもの確認よろしくね。」

アルベドは悲しそうな顔をするがしっかりと見送りの言葉を言うてくれる。

「かしこまりました。このアルベド、むささび様の留守、しっかりと務めさせていただきます。」

「お願いします。」

むささびはやり取りを済ませると指輪を使って移動するのだった。

「ささび様、おはようございます」

ゲートをくぐると依頼で野営したテントの中に出て、ナーベ、ユーリが迎えてくれる。

「うん、ソーイは？」

「ソーイは現在外の警戒に当たっています、夜中は何事もなく、モンスターなども現れませんでした。」

「そっか、ほかのみんなは？」

「一部の者は既に起きています。また漆黒の剣、ンフィーレア共に不審な動きはありませんでした。」

「わかりました、ありがとうございます」

ユーリと現状確認を終わらせると、テントの外に出る。

外は日が昇っている最中で、辺りを少し明るくしていた。

「お、おはようございます、ささびさん」

声のする方を見るとニニヤがこちらに近づいてくる。

「おはようございます」

挨拶を返すと、ニニヤは深く頭を下げる。

「昨晩は本当に申し訳ありませんでした！」

「…いいんです、僕の方こそすみませんでした、ニニヤさんは何も悪い事はしていません、ごめんなさい」

「、ありがとうございます。」

「この後はどうしますか？」

「たぶんみんなもそろそろ起きてくると思いますので」

「わかりました、僕は川で顔を洗ってきます」

ニニヤと別れ、小川の方へと行くとソーイが周囲を警戒していた。

「おはようございます、ささびさん」

「おはようソーイ、夜は何もなかった？」

「はい、多少モンスターがウロチョロしていましたが、こちらには来ませんでした。」

ソーイとやり取りをしながら小川の冷たい水で顔を洗う。

「ふー、ちよつと冷たいけど気持ちいい、ソーイはよく寝た？」

「いえ、ナーベと交代した後もテント内で警戒を続けていました。」

その言葉にささびは顔をしかめる

「ちゃんと休まないとだめだよ、休まないとパフォーマンスが落ちちゃうんだよ？」

どこからか持ってきたような言葉を使って、僕へ注意を促すが、あまり効果がない様だ。

そこへペテル達がやってくる

「おはようございます、ささびさん、ンフィーレアさんも今起きてきまして、朝仕度が終わったら荷造りを初めて出発しましょう」

「わかりました、それじゃあ、仕度、済ませてきちやいますね」

軽く挨拶を終えると出発へと向けて準備を始めるのだった。

「そろそろ到着します！」

ンフィーレアが周囲に聞こえるように言っていると、その言葉通りに道の先に建造物が見えてくる、村を囲んでいる柵が見えてきた

「あれ？おかしいな、あんな頑丈そうな柵前はなかったはずなのに…」

「ンフィーレアさんもしかして、違う村に来ちゃったとか？」

「それはありえないですよ、この道だってしっかり覚えてますから、でもどうやって…」

ンフィーレアの言葉に一行は警戒を強化する、開拓村にそんな速度で柵を建築するなんて不可能だろう、可能性としては帝国だ、万が一、帝国軍に占拠され、村が前哨基地として生まれ変わっているのなら、即座に撤退が必要だ。

「どうしますか？」

「行ってもよろしいでしょうか？」

ンフィーレアは申し訳なさそうに周囲を伺うが、彼が恋心を抱いている村娘があつた村に住んでいることを既に知っている漆黒の剣は首



を縦に振る

「まあ、まだ決まったわけじゃないからな、それに帝国軍だつたとしても、こつちが攻撃したり、逃げたりしなけりや、冒険者に攻撃はしてこないだろ」

「うむ、そうであるな」

「情報隠蔽の為にしばらく拘束されるかも知れないけどな」

メンバーは笑いながら冗談を飛ばしている。

「ささびさん構いませんか？」

（んー、国とのいざこぎになつたらめんどくさいし、アルベドから避けるようにって言われちゃってるんだけどなあ…でも…ここで依頼を投げ出す方がマイナスになっちゃうかな？…すぐに答え出さないと…）

「…はい、僕たちもそれで大丈夫です」

全員の同意が得られると村の柵へと近づいていく、入口へと続く一本道の脇には麦畑が広がっており、収穫されておらず伸び放題になっていた。

「ちゃんと管理してほしいな、これじゃあもつたいないだろう」

ペテルは死をいくつか乗り越えてきた経験から畑を凝視する…

とそこにはインフィーレア達を覗き見る目があったのだ、カモフラージュされ、良くは見えないが、その目が確実に人間の物ではない事だけは確かだった。

「なっ！」

ペテルが驚きの声を上げる当時、周囲の麦畑から悠長に喋るゴブリン達が武器を構えながら顔を出す。

「武器を下げてもらいましょうかねえ」

既に相手に囲まれ、こちらは武器も抜いていない、ペテルは自分が如何に早く動こうと、相手に突き刺される状況に冷や汗が止まらなかった。

出来るだけ多くの情報を得ようと首を動かさずに目だけで周囲を

見渡していると、更にゴ布林からの要求が飛んでくる。

「後ろのあんた達もだ、こっちの兄ちゃんたちはさして怖くねえが、あんたらは別だ、ちよつとばかりはさしませない雰囲気を作り感じるぜ」  
（探知魔法でわかってたけど、やっぱり『ゴ布林将軍の角笛』で召喚されたゴ布林たちだよな…部外者を警戒して、入れてくれなくなっちゃったのかな…どうしよう…ん？）

ささびは自分が持っていたアイテムの対策に頭を悩ませていると、更に前方から一人の人間が近づいてくるのがわかった

（最悪、正体をばらして入れてもらえないかなあ…）

「安心してほしい、俺たちはあんたらが危害を加えてこない限り、攻撃するつもりはない」

その言葉に怒りを爆発させたンファイレアが怒鳴りつける

「お前らが村を占領したのか！」

激昂するンファイレアをニニヤがなだめる

「ンファイレアさんちよつと落ち着いてください、どっちが有利か言うまでもありません、相手もどうやら積極的に攻撃を仕掛けては来ない様ですから、ちよつと様子を見ましよう。大丈夫です、ささびさんたちもいますから」

その言葉に少しだけ冷静さを取り戻したのか、深呼吸するとンファイレアは馬の手綱を力強く握った

とそこへ村の入口からゴ布林に守られながら一人の少女が顔を出す

「エンリ!!」

ンファイレアが村娘の名前を叫ぶと、相手も名前を叫ぶ

「ンファイレア！」

その声には好感の色が混じっており、漆黒の剣のメンバーもエンリと名前を聞いて、警戒を解くのだった

（あの人が言った薬師ってンファイレアさんの事だったんだ…ますますあの人の目的がわからなくなってきた…）

「そんなことがあったんだ…」

ンフィーレアはエンリから村に起こった惨状を聞かされ、無力感に苛まれていた。

エンリの傍により、慰めていようかと迷っているとそれよりも早くエンリは涙を拭き、覚悟の声を上げる

「妹もいるし、悲しんでばかりいられないわ」

そう覚悟をするエンリの顔を見て、改めて恋心を実感する、好きだ、愛している、そう伝えたい、村に入るまでの葛藤で更にその気持ちは強くなった

「エンリ!!」

思わず口から言葉が出る、エンリは急な大きい声にびっくりした顔でこちらを見ていた。

「……も、もし困ってることがあったら言ってよ出来る限り助けるからさー」

「うん！本当にンフィーレアは私にはもったいないくらい友人だわ！」

「…あ、あ、うん…いや、いいんだよ、長い付き合いだしね」

また機会を逃してしまったンフィーレアだったが、彼女が自分に向けてくれる笑顔はとても美しかった。

「それで…あのゴブリンたちはなに？」

「村を助けてくださった、むささび様が置いて行かれたアイテムを使ったら出てきたの。私に従って色々と働いてくれるわ」

(むささび？…ささびさんと名前が似てるけど…偽名使うんだったら流石にむを取るだけなんてお粗末な真似はしない…かな?)

「そうなんだ…」

ただそのむささびという人には村を、好きな人を救ってもらったとはいえ、嫉妬心を抱かずにはいられなかった、先ほどからエンリの口からたびたび登場する人物は窮地の村を圧倒的な力で救い、エンリの目をキラキラと輝かせていた、とても我儘な感情だが、男として、意中の相手の目線は自分に向かせたかったのだ

「それでそのむささびさんだっけ、どんな人なの？特徴とかわかって

れば知ってるかもしれないし、僕も会ったときにお礼を言いたいですね」

エンリから聞かされた人相はますます、ささびさんにそっくりだった、身長も同じぐらいの少年であり、ライトニングの魔法を自在に操るマジックキャスター

この国に小柄で高位の魔法を操るマジックキャスターは知っている限りでは二人しかいない。

「それに真つ赤なポーションをくれたの！」

ンフィーレアは疑問が確信に変わったように尋ねる

「…もしかして、その人って…女性？」

「？違うよ、顔はびっくりするぐらい綺麗だったけど、男の人だったよ。でも確か一緒にいた黒いフルプレート女性のアルベドって…」

もはや確定だ、『むささび』ささび『ここから違う場所を探す方がバカバかしいほど証拠が出そろってしまった。』

しかし、話を聞く限り、ささびさんは現在連れてくる仲間以上に強大な戦力を持っている、推定アダマンタイト級とされる、黒いフルプレート女性のアルベド

同じく、素手で騎士の鎧を突き破る執事、セバス

帝国四騎士すら陵であろう戦力は個人が所有しているいいものはなかった、無論むささびがどこかの国に所属しているように、その情報の価値は考えるだけで呼吸が荒くなるレベルの物だった。

自分はそんな人達にこそこそと近づいてはポーションの製法をしろうとしていたのだ。

思わず自分に嫌悪感を抱き、あまりにも価値が高い情報を持ってしまった事も相成り吐き気さえしてくる。

「だ、大丈夫？顔色悪くなったけど…」

その様子を魔法でナーベと一緒に覗いていたささびは失態を自覚していた。

(もー、これ完全にバレちゃってるよね…どうしよう…んー)

ささびがこれからどうしようかと考えていると、ナーベから謝罪の言葉が飛んでくる

「申し訳ありません。むささび様の正体が露見したのは私の失態です」

「でも…まあ、うん、失敗は誰にでもあるよ。今回はしょうがないよ」「いえ…ですがっ!」

とそこへンファイレアが息を切らしながらやってくる。

「ささびさん!」

ンファイレアはすぐ近くまでやってくると、息を整えてから話始める。

「ささびさんはむささびさんなのでしょうか?」

「…」

「ありがとうございます…この村を、エンリを助けてくれて!」

既に覆しようなのない真実を掴んだ少年に、ささびは小さく自信なさげに答える

「…ち、ちがうよ、ぼ、ぼくは…」

「わかっています、お名前を隠されているのは何か理由があるんだと、それでもこの村を、僕の好きな女性を救ってくれたことにお礼が言いたかったんです、ありがとうございます」

ンファイレアは感謝の言葉を述べると再び深く頭を下げる。

「…もー、頭を上げてください」

もうどう頑張っても弁明は出来ない、ならばいつそ認めてしまった方が楽だ

「それと隠していたことがあるんです」

ンファイレアから聞かされる内容によつてはナーベが有無を言わず丸焦げにさせる可能性もある、ナーベに目配りすると、ナーベは頭を下げて下がってくれる。こういうメイドとしては凄い優秀だ。

ひと払いがすむと、ンファイレアは覚悟を決めた顔をして話始める。

「実は…むささびさんが宿屋で女性に渡したポーシオンは通常の方法では作れない、非常に希少なものです。そんなポーシオンを持つ人物がどんな方なのか、それと製法を知るために、今回の依頼をしました。申し訳ありません」

「そっかー、そうだったんだね…」

(これでこの人の目的もわかったかな…それにしてもこれからどうしよう…ポーシヨンも返してもらわないとだめだよね…魔法で記憶消せたりするのかな?…なんかちよつとめんどくさくなつてきちゃったな…上げたものを返してくれ、なんて言えないし…よし帰ってアルベドとデミウルゴスに相談しよ)

「でもポーシヨンの作り方がわかったとしても、どうやって使うつもりだったの?」

少し考える素振りを見せるとすぐに話始める。

「そこまでは考えていませんでした、単なる知識欲の一環だったので…うちのおばあちゃんもそうだと思います。」

「それと、僕がむささびって知ってるのは貴方だけですか?」

ンフィーレアは自信を持った顔で即答える

「もちろんです!ほかの誰にも話していません!」

(よかった、これで漆黒の剣の人達まで知ってるなんてなったらお手上げだったよ…)

「今の僕はささびです、それを絶対に忘れないでほしいです」

「わかりました。」

その決意の目を確認すると、ささびは疲れたように俯くのだった。

「むささび様、申し訳ございません!」

ンフィーレアと話し終えた後、近づいてきたナーベは第一声から謝罪してくる。

深々と頭を下げ、顔は見えないが、恐らく自責の念に囚われているだろう。

「アルベドの名前を出しちゃったのはよくなかったね」

「この命で謝罪を!」

ナーベは腰に掛けられた剣を引き抜き自分の首筋へと当てる。

「やめて!」



「ここから森に入りますので、警護をよろしくお願いします。」

依頼主からの要請に漆黒の剣とむささび達は戦闘準備に入る、薬草採取をするメンバーを除けば、全員が武器を構え。ナーベとむささびはフライを使用して若干浮き木の陰からいつモンスターが現れても応戦できる構えだ。

そこへ依頼主から新たな注文が入る

「ささびさん、もし森の賢王が現れたら、殺さずに追い払っていただけませんか？」

だがその注文ははたから見ればかなりの無茶難題であり、ルクルツトがそれを指摘する。

「おいおい、そいつは流石に無理だぜ」

そんなことはお構いなしといった態度でささびは依頼主にその理由を尋ねる

「どうしてですか？」

「はい、実は森に近いカルネ村がモンスターたちに襲われないのは森の賢王がこの辺りを縄張りに行っているからなんです。それを殺されてしまいますと…」

(村にモンスターが出るようになったらさうやってことかな?・・・)

「わかりました、もし現れたらそうしますね」

その何気ない雰囲気は漆黒の剣は驚きの声をあげる

「まじかよ、相手は何百年も生きている伝説の魔獣だぞ…」

「強者だけに許された態度であるな…」

既にポイントに到着し、一行は薬草採取を始めていた。

「それでささびさん、この計画とは？」

「うん、アルベドの提案なんだけど、この森で有名な森の賢王ってモンスターがいるらしいんだけど、そのモンスターを討伐すれば、一気に有名になれるって、それで今森にアウラさんがいるんだけど、僕たちの方へ誘導してくれるって」

「その際はどうか対処しますか？」



「んー、アルベドが言うには圧倒的にやつつけた方がいらしいから…僕一人でやつつけてみるよ」

「かしこまりました」

そこへルクルットが森の賢王の足音に気が付く

「ちよつと待て何か来るー!」

ルクルットは地面に耳を当て、懸命にその音を聞き分ける

「早い!しかもかなりのスピードだ!」

「まさか森の賢王?!」

慌てる漆黒の剣とンファイレアに支持を出し撤退させる

「みなさん、退避してください、森の賢王は僕が迎撃します。」

その言葉に反論する者はなく、みなささび達の実力を信じていた。

「わかりました、お願いします。」

(つて護衛だからこれが最優先なのかもしれないけど…見てる人がいなかったら森の賢王かわからないし…殺しちゃダメって事だったし…どうすればいいんだろう?)

そんなことを思っていると、ンファイレア達は撤退し、足音はどんどんと近づいてくる。

ささびは足音がする方へ少し進むと防御系魔法をいくつか展開する。

そして…森の奥から大きくて黒い物が近づいてくるのが肉眼で確認する。

「クリスタルウォール」

バキツンツ!と堅いもの同士がぶつかる音が大きく静かな森に響き渡る。

攻撃してきた正体は蛇のような鱗に包まれた長い尻尾がゆっくりと木々の後ろへと下がっていく。

(凄い便利な攻撃方法…低レベルだからよかつたけど…高レベルになつたら結構強いかも…)

どう攻撃するか悩んでいると魔獣から深みのある声が届く

「某の初撃を完全に防ぐとは見事でござる」

「バ…(ち)や…る?」

「さて、某の縄張りへの侵入者よ。今逃走するといふのであれば、先の見事な防御に免じ、某は追わないでおくが…どうするでござるか?」  
「それはできません、依頼なので、ごめんなさい、で、でも、会話を  
する時は顔を見せるのは常識だと思います!」

「おお、それは失礼したでござる、では、某の偉容に瞠目し!畏怖する  
がよい!」

森の賢王は堂々と言い放つと木の陰からその巨体を見せる。

白銀の体毛に覆われ、先ほどの蛇の様な尻尾を持ち、体には魔法の  
文字の様な模様が浮かび上がっている。

「おおー」

「ふふふ。その仮面の下から驚愕が伝わってくるでござい!かわいい!」

「へ?」

その場全員から驚きの声があがる。

「凄い!ジャンガリアンハムスターだ!かわいい!」

「なんと!某の姿を見て可愛いと!それに某の種族を知っているでござるか?」

「うん!ちよつと違つたけど、貴方に似た動物を友達が飼つてた!」

後ろではプレアデスたちが「おお…」と感動している

「それはぜひ聞きたいでござる!生物として子孫を作らなければ生物  
として失格でござるがゆえに…」

「そ、それはちよつとわからないかな…」

「そうでござるか…」

「…ごめんなさい」

「いいでござるよ…それより!そろそろ無駄な話はやめにして、命の  
奪い合いをするでござる!」

(でもハムスター攻撃するなんてしたくないしな…よしっ!)

「スキル!龍の威光、レベル!」

むささびがスキルを使用すると、ものすごい勢いでひっくり返り、  
おなかを見せる

「降参ござる!それがしの負けでござるよ!」

(でも困つたなあ、強そうなのがよかつたのに、これじゃあペットだ

よね…)

来た道に戻り、森を出るとみなが喜びに満ちた顔で出迎えてくれる。

「お帰りなさい！戦闘は避けられたんですか？」

ささび達の戦闘をしたとは思えない綺麗な格好にニヤが訪ねるが答えは後ろから出てくる

「森の賢王?!」

「はい、森から突っ込んできたのでやっつけたんですけど…」

「この森の賢王、殿に仕え、共に道を歩む所存、皆々様には迷惑はおかけしないでござる」

「しや、喋った！」

「凄い！なんて立派な魔獣なんだ！」

(え？おつきいだけのジャンガリアンハムスターだよ?)

ささびが困惑していると、更に賞賛の声上がる

「強大な力と叡智を感じるのである！」

(どこに?!)

「これだけの偉業を成し遂げるとは！ナーベちゃんを連れまわしてるだけあるわ！」

「…み、みんなはどう思う？」

後ろのプレアデスに尋ねるが…

「強さはともかく力を感じさせる目をしています。」

「まさにささびさんの威光を広めるにふさわしい魔獣かと」

「この様な魔獣をペットとして飼われるなど、素晴らしいとしか言え  
ません」

(どうしてえ?!?!?!?)

ンファイレア達は採取も終わり、エ・ランテルへと帰還していた。

「それでは私たちは一足先にンファイアさんのお宅で荷下ろしを済ませておきます」

「荷下ろしだったら僕たちも手伝いますよ?」

「いえ、旅の途中、夜中の警護はささびさんたちにやってもらっていたのでこれくらいさせてください」

「:わかりました、それじゃあ、魔獣の登録が終わったらそちらに向かいますね」

「ささびさんのおかげで大収穫でした!追加報酬を用意して待ってますね!それでは!」

「ナーベちゃん!しばしの別れだけど寂しがらないでくれよ!」

「虫けらが!頭をひねりつぶしますよ!」

「さつさと行くのである!」

やり取りを終えると冒険者組合へと入っていく。

「みんなお待たせ!登録が終わったよ!」

ささびは登録を済ませると外で待たせていたプレアデスたちと合流する。

既に森の賢王を囲む人だかりができていた。

「いえ、待たせるなど、とんでもございません」

何度目かもわからない敬語はもう諦めることにする。

「ハムスケ!今日から君の名前はハムスケ!」

その名前を聞くとハムスケは満足した声で喜んでくれる

「わかったでござる!これからは殿にもらった名に恥じないよう努力するでござるよ!」

ハムスケの声を聴き更に集まっていた人々は驚きの声を上げる。

「喋った!」あの魔獣がカップのプレートって本当かよ!」

「蒼の薔薇じゃないのか?」

ささびは満足そうに胸を張ると、勢いよくハムスケに飛び乗る。

「じゃあハムスケ!ンファイアさんの家まで!」

「わかったでござる!」

とそこへ職人らしい少し汚れたエプロンを付けた御婆さんがやってくる。

「のうおぬし、もしや孫の依頼を受けた冒険者じゃないか？リイジー！バレアレというんじやが…ンフィーレアの祖母じやよ！」

「んー？あ、ああ！僕は依頼を受けたささびです、それにナーベ、ソリュ…ソリー、ユーリです、そしてこちらが…」

自分の番が回ってきたハムスケは嬉しそうに顔を上げる

「某は森の賢王！今はハムスケという名を殿にもらったでござるよ！」

いきなり顔を上げ、言葉を発する魔獣に駆け引きに心得のあるリイジーも恐れを抱く。

「こ、この精強な魔獣が、かの森の賢王だというのか？」

「は、はい、ンフィーレアさんの依頼の先で出てきて、手なずけちゃいました。」

「なんと…それで孫は今どこに？」

「今、家に葉草を置きに行っています、魔獣の登録が終わったので自宅に報酬を受け取りに行くところでした」

リイジーは調子を取り戻したようににっこりと笑みを浮かべると声を出す

「ほーなるほど！それでは一緒に行かんかね？」

「わかりました、よろしくお願いします。」

リイジーに連れられ、予定よりも早く家に到着する。

「来るのは初めてじゃろ？…ここが我が家じゃ」

そういつて扉を開けようとするリイジーをささびが制止する。

「ど、どうしたんじや？」

ささびは警戒しながら小さな声で警告する。

「中にアンデッドがいます…心当たりありますか？」

リイジーはアンデッドの名を聞き思わず大きな声を上げる。

「なんじやとー…それでわしの孫は?!」

「お、落ち着いてください、取り合えずはアンデット3体の反応しかありません」

「どうなっておるんじや…」

ささびはプレアデスたちを見る、既に戦闘態勢に入っており周囲を警戒してくれている。これなら説明は不要だろう、さすがは戦闘メイドだ。

「僕たちが突入して安全を確保します。」

「だがお前たちははカッパーじゃないのか？」

「登録したばかりでカッパーなだけです、実力は調べた限りこの街一番の冒険者です」

リイジーはハムスケを一度見ると息をのむ

「わかった！汝らを雇おう、報酬はいくらでもいい！孫を救ってくれ！」

「わかりました、少し待ってください」

ささびはリイジーからの了承を得ると魔法を発動させる、第八位階の情報系魔法だ、単純な感知魔法だが、それ故にこの世界の住人であればこの魔法から逃れられる者はいないだろう、罣がない事も確認した。

だがアンデットの姿を確認したささびの顔は一気に暗くなる

「わかった、中には死体1、アンデット3、扉を開けて正面、倉庫の方へまっすぐ行ったところ、罣、伏兵なし」

慣れた口調で端的に、必要な情報のみを伝えるとユーリが扉の前へと移動する。

「はっ！」

ユーリが正拳突きを放つと扉は軽々と家の中へと飛んでいく。

後ろからソーイ、ナーベ、ささびと続く。

そして家の中をしばらく進むと倉庫の扉へとつく

「……ユーリ殲滅して」

「かしこまりました、開けます。」

ユーリは一言だけそう言うと扉にタックルする。

吹っ飛んだ扉にペテルだった肉塊が一瞬で潰される。

ささびの命令を受け1秒とかからずアンデットたちは殲滅される。  
そこへレイジーが後ろから入ってくる。

「こ、これは…？ンファイレアは…」

「誰かがンファイレアさんを攫う為にしたんだと思います。」

「頼む！ささび殿！わしの孫を救ってくれ！さつきも言った通り報酬はなんでも支払う！」

レイジーの話を受けてささびは即座に了承する。

「わかりました、じゃあンファイレアさんの居場所を割り出します、少し外にいてください、ソーイ、ナーベ護衛をお願いします。」

二人に連れられ、レイジーは外へと出ていく

それを確認したささびは魔法を起動するのだった。

## 補足

「そんなのダメです！」

執務室にアルベドの悲痛な声が響き渡る。

食事を終えたむささびは執務室へと入り、エ・ランテルで冒険者になる旨を伝えていた。

「アルベド、声を抑えてください、御方の前ですよ」

「っ！失礼しました、ですが！情報収集というのであれば！僕に行かせればよろしいではないですか！むささび様自らが行かれる必要などありません！どうか命じてください！そうすれば完璧に情報収集してきてまいります！」

「…で、でも、ほらナザリックに僕以上の情報収集できるのは…」

その言葉にアルベドは割って入る。

「むささび様がされなくても！ニグレドがおります！あんな人間の街一つむささび様が出られる必要はありません！」

むささびがどう説得したものかと悩んでいるとデミウルゴスから援護が来る。

「アルベド、それではむささび様をナザリックに監禁しておくつもりかね？」

「っ！そうじゃないわ！でも情報も不確かな人間の国にむささび様自らが赴かれ、何かあったらどうするの！」

「無論十分な護衛をつけるとも、むささび様、護衛はどの様にお考えですか？」

むささびは少し考えると答えを出す

「えーつと…一人は流石にだから…じゃあプレアデスから人間に変装できる人…ナーベラル辺りを…」

「駄目です！私をお連れください！私はナザリックにて貴方様の護衛に私以上の適任はいないと自負しております！」

「またもデミウルゴスからの援護が来る。」

「アルベド君は人間に変装できるのかい？」



「出来ないわ、でもカルネ村の時のように鎧を着れば！」

「それでもだよ、この世界には私たちの知らない能力がいくつもある、それは君も知っているはずだ、そんな中、鎧で隠すだけなど簡単に見破られるだろう、最低でも人間種に変身、変装できるものが望ましいだろう。」

「づっ！」

アルベドはデミウルゴスの反論に変な声を上げる

「むささび様、お考え直していただけますか？むささび様が万が一襲われた場合でも、安全に転移していただくだけの時間を稼ぎ、尚且つ人間種に変身できるもので：プレアデスよりナーベラル、ソリュシャン、ユリ辺りが適任化と」

その提案にアルベドが口をはさむ

「足りないわ！むささび様！お願いします！私を連れていけないというのであれば！せめて！せめて軍をお連れください！」

「アルベド！むささび様は戦争をしに行くわけではないのだよ？それに…」

デミウルゴスはアルベドに耳打ちする、むささびの距離からは聞き取れない

「いいかい？良妻は夫に常に付き従うものではなく、家で帰りを待つのだよ？」

(それでも！)

(いい加減冷静になってほしいものだね、それにプレアデスたちが三人もいれば、逃げるだけの時間稼ぎには十分だ、もし襲われた際はすぐに迎撃部隊を出し、同時に救出部隊も出す、ここまでしても不安まだかな？)

「つつっ！わかったわ、むささび様行つてらっしゃいませ、私は貴方様の帰りをナザリックにて待たせていただきます！（妻として！）ですがお約束ください、私の元に、ナザリックに必ず戻られると、」

(よくわからないけど納得してくれた？…やっぱリアルベドにはナザリックの中心にいてほしいしよかった…よね？)

「わかりました、ギルドにかけて誓います、ナザリックに、みんなの元

に必ず戻ってきます！」

「ならばもうお引止めはしません、行ってらっしゃいませ！無事を祈っております！」

## 第7話

エ・ランテル付近の街道に一台の豪華な馬車が走っていた。

「デミウルゴスの計画はうまく進んでいるようでありんすね」

馬車の中にはシャルティア、その左右をヴァンパイア・ブライド、対面にはセバスが座っていた。

「はい、あの業者が野党の一味であることは既に確認しております。ここを少し進んだところで待ち伏せしているようです」

「はあ、シャルティアはため息をつく」

「ほんとにむささび様のお役に立てるような人間がいるんでありんしょうか…むささび様は既に森の賢王なる魔獣を捉え、そのお名前を更に高められたそうでありんすが…」

「さっそく成果を上げておられるとは、流石でございますね、それにシャルティア様の黄金の輝き亭での演技も素晴らしい物でした」

「至高の御方の為なら当然でありんす」

胸を張りながら答えるシャルティアにセバスは少し緊張しながら疑問を投げる。

「しかし、シャルティア様、大丈夫でしょうか、これから大量の人間を捕獲しろとのことでしたが、血の狂乱の発動は…」

その疑問にシャルティアは舌打ちをする。

「私以外にこの任務に適任なものはいないでありんす、私のスキルは集団戦にも有利でありんすからねえ、デミウルゴスが童をこの任務に就かせたのは恐らくはテストの意味がいりんしょう？血の狂乱も抑え込んで見せるわ、むささび様の為に！」

目を輝かせ、今はいない自らの主人のことを思うシャルティアだったが

「どうやら馬車が停止したようです。」

「そうでありんすねえ」

これから主人の役に立てる二人の声はどこか嬉しそうであった

むささびは一度ナザリックに帰還し、そこでアルベドとデミウルゴスに相談を入れていた。

「そうですね、先ずはそのレイジーには己の全てで支払っていたかもしれません」

「え、全てつてどうするの？」

「レイジーにはカルネ村に移住させポーション研究をしてもらいます、現在ナザリックではポーションを永久的に生産することはできません、その為こちら側のポーション、一部手に入れることが難しいユグドラシルの材料を使わずにユグドラシルと同じレベルのポーションが作れるように働いていただきます」

その言葉にむささびは疑問を持つ。

「え、でもいいのかな…」

「話を聞いた限りではありませんが、あの二人であれば喜んで我々の出すポーションに飛びついてくるでしょう」

「ん、わかりました」

「敵の情報は既にむささび様が全て集められている…ならばアンデッドの軍勢の方は街に被害が出るまで待つか、早期解決の道がありますか…」

むささびは少し考えると答えを出す

「やっぱりあんまり被害は出さない方がいいかな…」

「大丈夫でございます、早期解決でも死体さえあれば問題ありません。」

「敵の首謀者はむささび様自らが対処されると聞きましたが…」

むささびは少し暗い顔になり答える

「…漆黒の剣の人達は拷問されてた、それに敵の目的も伏兵がない

事も、畏じやない事も確認してるから」

「かしこまりました。」

「敵の目的、強さ、人数、目的、全てはむささび様により明かされました。であれば問題ないでしょう、それではむささび様敵のアンデッドの軍隊が墓地を囲む壁に到達し、駐留中の兵たちが撤退を始めたら作戦を開始いたします、よろしいですね？」

「わかりました」

作戦会議も終わり、ゲートを開こうとするむささびをアルベドが止める。

「むささび様、今日はナザリックにお戻りになられるのですよね？」

「うん、作戦が終わったら帰ってくるよ」

「かしこまりました、このアルベドご帰還をお待ちしております、行ってらっしゃいませ」

「うん、アルベド、行ってきます」

エ・ランテル墓地、夜であれば普段、異様な静けさを放つ墓地はスケルトンの出す音や戦いの音をその夜に響かせていた。

「やばいぞー！百とか二百じゃないぞー！千はいるー！」

「駐屯地に救援の要請は?!」

「とっくに出してるっ!!よっ!!」

壁を上ってくるアンデッドたちは殺せど殺せど数を減らさず、壁を上ってくる。

既に何人かの兵がやられ、何体か壁の上にながってきている。

「だ、ダメだ…」

「て、撤退だ！撤退しろ！」

その言葉を聞くやいなや全員が一目散に逃げだす

後ろから骨と骨がぶつかり合う音に耳を塞ぎながら階段を駆け下りる。

壁から離れ、走っていくとそこには異質な四人組が立っていた。

「ぼ、冒険者？」

そこには緊急時でなければ見惚れるような美しい女性三人と異質な仮面をかぶった小柄なマジックキャスターが立っていた

冒険者だが首から下げられているプレートを見て落胆する

「おい、カッパー！すぐにここを離れろ！」

そんな呼びかけに無関心に冒険者たちは壁の方を見つめ居ていた  
「後ろ」

小柄な仮面をつけたマジックキャスターの言葉に振り返る

そこには壁から顔を出す巨体、ネクロスオーム・ジャイアントの姿があった

「なっ…」

「ツイン・マキシマイズマジック・ライトニング」

青白い光と轟音が放たれ、見ただけで絶望を感じさせる巨体を持つアンデッドがその一撃を受け霧散する。

「あ、あんた達何者だ？」

「みんな行くよ」

問いかけに答えることもなくむささびは壁を乗り越えていく

「お、おい聞こえるか？」

「何がだ？」

「アンデッドの立てる音だよ！」

生き残った三人は再び壁を登り見渡す限りのアンデッドだった墓地を見る。

「嘘だろ？」

無限にいとすら思えたアンデッドたちは既に押し返され始め、四人は圧倒的な力でアンデッドを蹂躪していた。

「俺たちは伝説を目にしているのかもしれない…」

「まさに艶麗の英雄だ…」

「ファイヤーボール！」

真つ赤な火球がアンデットへとぶつかると爆発しながら周囲のアンデット共々燃やし尽くす、

むささび達は既に墓地中腹へと足を運んでいた。

「しかしささびさーん、ハムスケをおいてきてよかったですか？」

「うん、危険はないけど依頼主を守ってもらわなきゃならなかったしね」

そこへメッセージが届く

《むささび様よろしいでしょうか？》

声の主はエントマだろう

《エントマ？どうしたの？》

《アルベド様より伝言を預かっております》

(アルベドから？さつきアルベドとは話してたけど…)

《今は戦ってるから、いろいろ終わってから聞いてもいい？》

《はい、ではその時はアルベド様をお願いします》

《わかりました》

その言葉を最後にメッセージを切り、指示を出す

「そろそろかな、ソーイ、ナーベはここに残って、ユーリこれをやった人たちの所まで行こう」

「かしこまりました」

フライによりアンデッドたちを無視して奥へと進んでいく

しばらく進むと真つ黒なローブに身を包んだマジックキャスターらしき集団が見えてくる

距離のせいであまり聞き取れないがごによごによと儀式の言葉を口にしている

「カジット様、来ました」

(いきなり名前…？本名は知ってるけど…)

「カジットさんこんばんは、儀式をするにはちよつと似合わない日で

すね」

カジットは舌打ちをし、名前を呼んだ部下を睨みつける。

「ふんっ！儀式に見合う夜か否かはわしが決める事よ、おぬしらしいたい何者だ？」

「依頼を受けた冒険者です、ンファイレアさんを返してください」

「それは出来ぬ相談よ」

むささびはため息をつく

「そのクレマンティーヌさん、出てこないんですか？」

カジットの後ろを指さし告げるとカジット達は少し驚きの反応を見せる

「へえー私の事知ってるんだあ〜」

「おぬし！」

「いやあくバレバレだったからさあく隠れててもしようがないじゃん？それにしてもどうやって私の名前まで調べたのかな？…風花…つて柄じゃなさそうだね〜」

マントを羽織った女は気味の悪い笑みを浮かべ、余裕の態度を見せていた

「それでそちらさんの名前を聞いてもいいかな？私の名前は知ってるみたいだからね〜、よろしくね」

「言ってもしようがないけど、冒険者のむささびです」

「ん、確かにねえ〜、しっかしどうやってここがわかったのかなあ〜？」

「それは企業秘密です」

「あ〜ん！お姉さん悲しい…」

「ユーリ、カジットとその男たち任せてもいい？」

ユーリは両こぶしを合わせカジット達を見据えると余裕の態度で返す

「問題ありません」

そしてカジット達には聞こえないように小さ目な声で警告する

(上に注意してね)

ユーリは無言で頷く。



「クレマンティーヌさん、僕たちはあつちで戦いませんか？」

「大胆だねえ、おっけー」

ささびが歩き出すとクレマンティーヌは鼻歌を歌いながら後ろを歩いてついてくる

しばらく歩いているとクレマンティーヌがささびに話しかける

「そういえばあのお店で私がやったのってお仲間？もしかして仲間殺されて怒っちゃった？ふふふふっ♪大爆笑だったよあのマジックキヤスター、最後まで助けがくるって信じてたみたいよ？ごめんね？殺しちゃって」

「うるさい、黙ってあるいて」

その反応に更にクレマンティーヌは嬉しそうな声を上げる

「いや〜ごめんね？お姉さん『よくも仲間を！』って激昂してくる奴をねじ伏せるのが楽しくて大好きなんだ！でもあんまり怒ってないみたいだねー、ほんとには仲間じゃなかった？」

「僕の仲間をもっと強いし、あなたじゃ絶対に勝てない」

「ふんっ！お前の仲間がどんなくそったれかは知らねえーがこの人外！英雄の領域に足を踏み込んだこのクレマンティーヌ様が負けるはずがねえーんだよお！」

その言葉にささびは足を止める。

「それじゃあかかってきたら？僕は仲間の中でも戦闘特化じゃないよ？」

その言葉にクレマンティーヌは笑みを浮かべる

「マジックキヤスターなんてすつと行ってどすつ！それで終わりだよいつも、この国で私と互角に戦えるのは蒼の薔薇と朱の雫に一人ずつ、ほかにはガゼフ・ストロノーフにブレイン・アングラウスくらいかな？」

「へえー、じゃあハンデを上げるよ、漆黒の剣の人達はこの街に来て最初にできた友人だった、だからそれで復讐するよ」

「ガキッ！」

むささびの挑発に激高したクレマンティーヌは驚異的な瞬発力で勢いよく突っ込んでくる。がささびはそれを許さない

「ライトニング」

ささびの攻撃にクレマンティーヌは笑いながら後ろに飛びのく

「あははっ！」

直ぐに体制を整え、右から、左からと接近を試みるが同じくライトニングがそれを阻む

本来のライトニングであれば武技も使わず避けて刺し殺せるクレマンティーヌだが、むささびの目はそんなクレマンティーヌの動きをしつかりと捉え的確に魔法を放っていたのだ

「あーああ、私疲れちゃったなあ」

ささびは暗い顔で言葉を返す

「どうしたの？さっきから回避ばかり、自分に勝てるマジックキヤスターはいないんじゃないの？」

むささびの挑発に笑いながら答えるクレマンティーヌ

「ふふふっ！それじゃあ行きますよー」

マントをビキニアーマーがあらわになる、動きやすさを重視したアーマーにはハンティングトロフィーの様々な色の冒険者プレートが張り付けられていた。

「きゃー！あんまり見ないでよくお姉さん恥ずかしい」

そういうとクレマンティーヌはステイレットを手に取り、体制を低くする。

その姿は獲物を狙うネコ科の動物の様であった

笑みを浮かべると一気に加速し距離を詰めてくる。

「ライトニング」

接近するクレマンティーヌを稲妻が焼き尽くそうとした寸前

「流水加速！」

クレマンティーヌが武技を発動すると、更に加速し稲妻の下を抜ける、むささびとの距離を詰め、その肩にステイレットを突き刺す

ローブにステイレットが当たるとガギインツ！と布に突き立てたとは思えない音が鳴り、クレマンティーヌは舌打ちをしながらすぐさ

ま後方へと退避する

「かつたいなあ、マジックアイテムかな？」

「攻撃僕に効かないみたいだね」

さらなるむささびの挑発にもクレマンティーヌは乗らない

「なら今度はもつと防御の薄い個所を狙えばいいだけだしねえー」

言い終えると再び体制を低くし突っ込んでくるが、一度見たやり方はむささびには通用しない。

「ツイン・マキシマイズマジック・ファイヤーボール」

一つはクレマンティーヌの足元に、もう一つは飛びのきぎまの予想地点に火球が放たれる。

これまでと違い直撃を狙わず爆炎による範囲ダメージを狙った攻撃はクレマンティーヌの回避先を読み、左手を焼く。

「くっ!!」

「どうしたの？まだ僕に一ダメージも入れられてないよ？」

「舐めるなよクソガキ！お前だって第三位階を連射してれば魔力が尽きる、二連射なんて高度な魔法そうポンポンは撃てねえーだろ！」

「そうだね確かにこれは反則かも、じゃあファイヤーボールは使わないで上げるよ」

その言葉にクレマンティーヌは激高する。

「本気で言ってるのかてめえ！」

「早くかかってきなよ」

「チッ！」

クレマンティーヌは先ほどよりも強く地面を蹴る。

「ライトニング」

(こいつっ！ほんとに使わない気か！)

「流水加速！」

クレマンティーヌは稲妻を紙一重で回避しむささびの首にスティレットを突き立てようとするが、

「シヨックウェーブ」

「っ！不落要塞！」

不可視の衝撃波が接近してきたクレマンティーヌを襲うが武技を

使い無効化する。

「ふっ！」

笑いながらステイレットを突き立てようとするクレマンティーンにさらなる魔法がかかる

「ヘイトス」

その魔法が発動するとクレマンティーンは自分の速度が異様に早くなったのを感じる。これまでの速度をいきなり変えられ、その攻撃を大きく外す。

加速されたクレマンティーンはその場を一気に離れると自分の手を見る

「相手を逆に加速させるなんてね、初体験だったよ？」

「魔法も使い方次第、味方を援護する魔法も時には敵にも使える：りんきお、うへんだよ」

そんな会話をしているとユーリの方から轟音が響き、巨大なアンデッドがこちらからも確認できた。

「スケリトルドラゴン…」

「正解！、よく知ってるね、かじつちゃんに強化されたスケリトルドラゴンはかなりの強さ、それが二体、お仲間が不安になってきたんじゃない？」

「あんな骨、ユーリにはわけないと思うよ」

「ふーん♪信頼してるんだ、いいね、そんなお前の前にあいつの死体を転がしたらどういう顔になるのかな？」

クレマンティーンの発言に不快感をあらわにすると更にクレマンティーンは挑発してくる。

「あ、雰囲気変わったね、ねえー僕？よかったらその歪んだ顔、マスク取ってお姉さんに見してくれない？お姉さんそういう歪んだ顔が大好きなの！」

「……………」

「あれれ？怒っちゃった？」

むささびは無言のまま嫉妬マスクを外す。

そこにさらなる挑発を入れようとするクレマンティーンだったが、

その少年の目の暗さに思わず口を紡ぐ。

「…もう、いいや」

クレマンティーヌは訳のわからない恐怖感に襲われていた、少年がマスクを外した途端、少年が大きくなったかのような感覚に襲われる不安をかき消すようにクレマンティーヌは突撃するが、むささびは何もしない

(何もしない?!)

動かない少年に構うことなく肌に見える首にステイレットを突き立てる

「死ねっ!」

柔らかい感触がする腕は硬い物を叩いたように痺れていた

「なっ!」

その一瞬の硬直を見逃さずむささびはクレマンティーヌの手首を捕まえる

クレマンティーヌは間髪入れずもう一方の手で肌の見えている手を突き刺すが、先ほどと同じく堅い質感に阻まれる

「くっそ! 放せ!」

むささびは絶望を感じさせる暗い表情のまま腕に力を入れ始める  
掴まれた腕からはミシミシと嫌な音が流れ、女の悲鳴が闇に溶ける

「あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ」

バキバキと音がなり、骨が砕け、血管が切れたのか鮮血が噴き出す。

「放せ! この!」

痛みに顔を歪ませながらクレマンティーヌは必死にこちらを攻撃してくる。

「…お話が好きなんでしょ? 上に行って話そうか…」

むささびはそうとだけ言うとフライの魔法で一気に上空へと加速する。

「っうあがぁ! やめろ! がぁ! 何するつもりだ!」

上昇中も抵抗するクレマンティーヌを無視して雲の上程の高さに到達する。

「…ねえ知ってること…教えて…?」

「ふざつつつけるなっ！うがあ！誰がお前に！」

了承を得られなかったむささびは更に腕に力を込める

「あゝあゝあゝあゝあゝ」

必死になって腕を外そうとクレマンティーヌは噛みついたりしてきている

「…周りをちゃんと見ないと…ここで腕から離れたら死んじやうよ…？」

クレマンティーヌは静かに周りを見渡すとそこは雲海に覆われた夜空だった

「ひっ!!!」

「…そんなに放してほしいの？」

そういうとむささびは腕の力を緩める

「やつ、やめて！」

むささびは離さないでほしいというクレマンティーヌの願いを聞き届ける

「あゝあゝあゝあゝあゝ」

むささびの腕はそこに腕が握られているとは思えないほど締まっていた。

「…教えて？」

「…わがった…答える…答えるから」

クレマンティーヌの顔は恐怖一色に染まっていた。

「…アインズ・ウール・ゴウンって知ってる？」

「…しっ、知らない」

「…ほんと？」

むささびは腕を持ち上げ、自分の頭と同じ高さの位置にクレマンティーヌの顔を持つてくる。

クレマンティーヌは少年の目の奥の闇を見ることは出来なかった。

「…どうして目を逸らすの…？」

「ほ、ほんとに知らないー」

再び目を合わるがすぐに逸らす

「…やっぱり、嘘つき…」

「違っ！ほんとに！ほんとに知らない！」

「…嘘ついたら落とすしちゃうよ？」

「わかった！わかった！わかった！わかった！」

クレマンティーヌは必死に恐怖から逃れようと声を上げていた。

「…ぶくぶく茶釜さん…って知ってる？」

「知らない、知りません！」

むささびは再びクレマンティーヌを持ち上げ目を覗き込む。

「ひっ!!!」

そしてクレマンティーヌにはわけのわからない質問が39回繰り返される

・

・

・

「知らない、知らない、知らない、知らない知らない知らない」

「…そっか…じゃあもういいよ」

その言葉に絶望の顔を上げる

「ま、まさか！おまえええええ!!」

むささびはぱつと手を離す、絶叫を発しながら落ちていく女を死んでいる虫を見るような目で眺めていた

マスクをつけ直し、下へ降りるとプレアデスたちが出迎えてくれた。

「お疲れ様です、さささび様」

「…うん、終わった？」

「はい、アンデッドの軍勢、カジットを含めた男たちも既にかたづけました。あの女はあちらに」

ユーリが指さす方を見ると墓地らしい枯れ木の尖った幹にクレマンティーヌだったものが深々と刺さっていた。

「…うん」

「それでは死体はナザリックへと持ち帰りますか？」

「…事件の首謀者が必要だつてデミウルゴスが言つてたから置いておいて、でも珍しい物があつたら拾つておいて」

「じゃあンファイレアの所に行つてくるよ、もう敵はいないから待つてて」

何か言いたげに前に出るナーベをユーリが止め、頭を下げる

「かしこまりました」

薄暗い墓地の階段を下りていくと、前方にンファイレアが現れる。

目から血を流し、薄い羽衣のような布をまとい、頭にはマジックアイテムが付けられていた

「確か、叡者の額冠だっけ？…ユグドラシルにはなかったよね…依頼だし、しようがないよね…グレーター・ブレイクアイテム」

むささびの魔法により叡者の額冠は跡形もなく砕け散る。

倒れるンファイレアを支え、布を被せる

「失明はソリユシャンが治せるよね…」

地上へと上がりソーイにンファイレアを預け、治療を頼む。

「ンファイレアの治療が終わつたらお店にいるリイジーまで連れて行つてあげないとね」

とそこへ冒険者らしき男たちが近づいてくる。

「これは…お前たちがやったのか？」

男たちはあたりの大量の動かないアンデッドたちを見渡し驚きの声を上げている。

「はい、あなた達は？」

「お、俺たちはミスリル級冒険者チーム、クラルグラだ、悪いが一緒に来てもらどうぞ」

男の強気な態度にむささびは少しだけ警戒する



「どこへですか？」

むささびの態度を生意気と取り、男は露骨な態度で接してくる

「は？馬鹿か？組合へだよ、お前らだって冒険者なんだろうが、だって先輩の俺たちに黙ってついてこい！」

「…わかりました、ちよつと待つてください」

面倒くさそうに答えるとプレアデスたちへ指示を出す

「ソーイはンファイレアさんを家まで送ってあげて、ハムスケも連れてきていいよ、ユーリはついていってあげて」

むささびはプレアデスたちへの支持が終わると男たちに向き直り声色を落としてしゃべり始める

「そういう事なので、行くのは僕とナーベだけで」

男は舌打ちをするとソーイに抱えられた少年を見る

「ンファイレア…つったか？」

「そうです、早くいきませんか？」

男はソーイが担ぐ少年の顔を覗き込もうとしているが布にくるまされた少年は髪がでているだけではつきりとは見えない

「クソッ！わかった、ついてこい！」

「はあー、イグヴァルジの報告では、スケルトン、ゾンビがおおよそ六百に、数体のワイト、2体のオーガン・エッグという報告だったか？」

エ・ランテル冒険者組合、組合長プルトン・アインザツクは職員から聞かされている報告に頭を抱えていた。

「そんなちやちなものではありません！ゾンビやスケルトンをだけでも千近くが確認され、それだけでなくグール、ガスト、ワイト、スウエル・スキンも何体も確認されています！それにオーガン・エッグだ

けではなく、ネクロスオーム・ジャイアントの目撃も複数寄せられています。」

「それで、それを解決したのがカツパーの冒険者チーム：艶麗の英雄と呼ばれていたな、既に確認したがそのリーダーは年齢こそ不明だが恐らく、幼い身でありながら第四階魔法を操る既に英雄級か：」

こんな異端の者たちどう扱ったらいい物か第四階魔法を操っている時点でミスリル級、話を聞けばアダマント級の实力を持っていてもおかしくはない、無論自分の冒険者組合に強者が現れるのは歓迎だが、これからの事を思うと頭が痛かった。

「街での聞き取りも行いましたが、まさに英雄といった反応でした、恐らく兵士たちから話が広がったのかと」

「それに街一番の薬師ンファイレア・バレアレの救出に、まだ詳細不明だがブローラーノーンと思われる者達の撃破、一つ一つに依頼を出し、昇格を考えるに値する物だ：お前は どう思う？」

職員は考える素振りも見せず即答する

「オリハルコンいやもしかするとアダマントの実力を持つかもしれない、まさに英雄かと」

「わかった、取り合えず艶麗の英雄を呼んできてくれ」

「わかりました」

職員は頭を下げた英雄たちを呼びに行った

「艶麗の英雄たちよ、呼び出したのに待たせてしまつてすまない、さあかけてくれたまえ」

アインザックは待たせていた件の冒険者を部屋へと呼び出していた。

部屋に入ってきたときの彼女たちはあまりに美しく目を奪われかけたが、冒険者組合長という手前そんな威厳ない事は出来なかった

「ありがとうございます」

お辞儀をしてから用意されていたソファアーへと座る

「私は冒険者組合長、プルトン・アインザックだ、よろしく」

「僕はささび、こちらはナーベです、よろしくお願いします」

むささびがお辞儀をするとアインザックはにつこりと笑顔を浮かべている

「報告は聞かせてもらった、まさに英雄の働きだ、現に君たちは既に街で艶麗の英雄と呼ばれているよ」

「あ、ありがとうございます」

(艶麗って……リーダーの僕は?!)

アインザックは少し険しい顔になると話始める。

「まずは冒険者組合長としてお礼を言っておこう、今回の件を大した被害も出さず、早期解決できたのは君たちのおかげだ、ありがとう」「いえ、たまたまその場に居合わせただけです。」

アインザックは手元の書類に視線を落とすすぐに向き直る

「未だ全容が把握できたわけではないが、今回の事件の一つ一つの事象が、君たちを昇格させる様な事件だ、こちらは君たちが既にアダマントタイト級の強さを持つことを確認している、だが今回はミスリルで我慢してほしい」

アインザックは仮面越しの表情を読み取ろうと反応を伺うがあまり情報は得られない

「大丈夫です」

「本当にすまない、本来であればオリハルコン級に昇進させるところだが、エ・ランテルにはミスリル級冒険者が一番のトップだ、混乱を避けるためと認識してほしい」

「わかりました。」

「ふむ、それじゃあプレートを渡しておこう」

アインザックは机から四枚のミスリルプレートを取り出し、渡してくれる。

渡されたプレートをその場で付けるとアインザックは満足そうに頷く

「納得してもらったようで良かった、してむささび君?」

要件も終わり帰ろうとするむささびをアインザックが引き留める。

「君は一体年齢はいくつなんだい?それにその仮面……できれば顔を見

ておきたいと思っただけ」

「アインザックは笑っているが、事実顔も知らない奴を信用できないという意図も含まれている。」

「…か、仮面は特殊なマジックアイテムでして、特定の条件が揃わないと外せないんです」

「呪いのアイテムという事か？それだったら私の友人に魔術師組合の「いえ、僕の力を強化するもので、デメリットとして、そういう条件がある」という事です」

「そうか、それは残念だ」

「それと僕の年齢は13歳です」

その言葉に冷静を装っていたアインザックはつい声を上げてしま  
う

「なっ！その年齢で第四階魔法を習得したのか！いったい…失礼少々取り乱したようだ、いやいいんだ、また今度時間がある時に話を聞かせてくれ、疲れただろう、宿に戻ってゆっくり休んでくれ」

「はい、ありがとうございます、失礼します」

むささびは別れの言葉を言うと部屋を後にする。

むささび達は事情聴取も終わり、以前組合から紹介され泊まっていた宿へと戻っていた。

むささびはドアを開けると胸を張りながら誇らしそうにカウンターへの道を歩いていった。

一定の賑やかさがあった一階のバーは再び一行の登場で静まり返るが、初来店時とは全く違った反応だ

静寂の要因は首から下げられたプレートだろう。

カウンターまで到着すると店主は驚きの声を上げる。

「おまえ…」

一度顔を見ただけのカップラーが次にあった時にはミスリルのプレートを下げている。

そんな常識外の事に戸惑っているようだ

「四人部屋をお願いします。」

再び同じセリフと同じ金額を唾然としている店主へと渡す

「あ、ああ、これが鍵だ」

もはやむささびを笑うものはこの宿にはいなかった。

部屋へと入ると、ナーベを待機させ、ゲートを開きナザリックへと帰還する。

本当はメッセージを入れるはずだったがもう帰った方が早いと判断しての行動だった。

ゲートをくぐりナザリック地表に出るとアルベドとナザリックでは珍しいシモベ達が出迎えてくれる

「お待ちしております、むささび様」

普段と雰囲気が違う、かなり真剣な面持ちだ

「ご報告させていただきます。シャルティア・ブラッドホールンが反旗を翻しました」

「…え？……じよ、冗談だよね…？」

アルベドは真剣な顔を崩さない。

「まずは玉座の間へお越しく下さい。ご報告いたします」